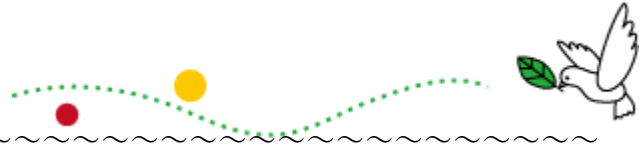


「近代」というシナプス

～連鎖する「近代革命」～

シンキング・バース

歴史科学研究班



目 次

第2章 「近代」の始まり

◆始まるためのユーラシア的条件

・すべてはモンゴル帝国に始まる	12
【コラム】「タタール」の定義	14
【コラム】ヨーロッパから見た東方世界	15
・「神の国」の現実	15
【コラム】中世西ヨーロッパの世界観	17
・同時代の日本の状況	18
【コラム】日本史の位相	18
【コラム】日野富子・再考	21
・「都市」と「農村」	22

◆ローマの落日 神々からの伝言

・都市への回路Ⅰ	26
【コラム】山の小さな共和国	27
・都市への回路Ⅱ	28
【コラム】平泉は「都市」か？	32
【コラム】「復讐」が裁かれる時	33
【コラム】「社会」について	34
・占星術から天文学へ	35
・「聖愛」と「俗愛」	39
【コラム】性的表現への感性	41
・失われた肉食	43
・閉じられた15世紀	45

※この論考の著作権は、図表、グラフを含めてシンキング・バース及び当該著作権者に帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。

第2章 「近代」の始まり

始まるための ユーラシア的条件

●すべてはモンゴル帝国に始まる

ヨーロッパ史の「近代」は、1000年の歴史を誇っていた東ローマ帝国（Eastern Roman Empire 395-1453）が、イスラム勢力のオスマン・トルコ帝国（Ottoman Empire 1299 - 1922）に滅ぼされた1453年を分岐点にするという説があります。90日間に及ぶ籠城戦の末、首都コンスタンティノープル（Constantinople）は、陥落したと伝えられています。

この時点での西ヨーロッパは、ほとんどボロボロ状態の辺境（Marginal land）でした。

◆「近代」への前史

その前史として私たちは、モンゴル（蒙古）帝国（イェケ・モンゴル・ウルス Mongol Empire 1206 - 多説あり）という、ユーラシア史上で例を見ない侵略国家の歴史から始めなければなりません。「世界史はモンゴル帝国に始まった」です。

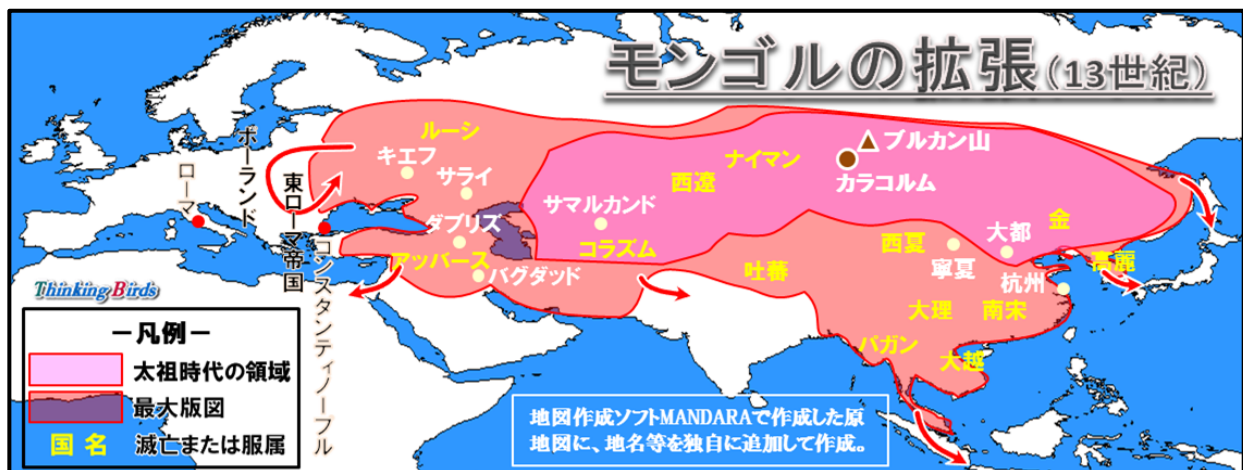
モンゴルは、現在のモンゴル国（Mongolia）付近を本拠に、騎馬遊牧生活を送って来た人々です。中国史上では、古くから「匈奴」などに括られ、北方から侵入を繰り返す人々

の一部族として恐れられました。そのモンゴルは、13世紀初頭に登場したチンギス・ハン（成吉思汗 1162-1227）によって、史上空前の侵略による広域国家を建設しました。その帝国の最大版図は、西は東ヨーロッパ、東は沿海州から朝鮮半島、南は東南アジアからペルシャ湾岸（インドを除く）に及ぶ広大な地域でした。

その侵略行為は、突然の襲来による攻撃と掠奪、有無を言わせぬ服属の強要、既存の都市的生活空間の破壊と、人類史に大きな爪痕を残す振る舞いだった、と言えます。チンギス・ハンは、モンゴルにとっては稀有の英雄だったとしても、侵略を受けた人々にとっては、「ヒト」とは言えぬ悪魔だったにちがいません。

◆遊牧民への眼差し

人類は古くから、狩猟と牧畜を食糧確保の手段の一つとして来ました。しかし、農耕の始まりと共に、耕作定住生活を送るようになったとされています。一方、中央アジアから黒海周辺の草原地帯では、牧畜の延長線上にある遊牧によって、移動しながら生計を支える人々が生まれました。遊牧民は、草原型の自然条件下で生きていくために、農耕作物に力点を置かず、飼育動物を主食源とする生活スタイルを維持発展させた、と考えられます。



歴史研究

「近代」というシナプス

遊牧の生活は、基本的には親族からなる小規模集団が、ヒツジとヤギを核とした飼育動物の群れと共に、季節的に牧草適地を移動するスタイルです。動物の群れを親族集団が共有で管理し、その乳と肉によって、集団の食生活を維持しました。土地の領有意識は基本的には希薄で、食糧源となる飼育動物の数の確保と維持が、生活上最大の価値でした。

しかし、遊牧生活は、牧草の状態が天候に左右される上、疫病の蔓延などによる家畜の増減、自然災害、部族間の争いなど、不安定要素を抱えていました。そのため、出張的移動（オトル otor）と呼ばれる集団的避難行動を、常時繰り返したとされています。

また、遊牧生活は、農耕以前の狩猟生活の側面を持っていました。狩猟は、漁労を含めると、現在も続く食糧確保の一つの手段です。その中で、黒海周辺以東のユーラシア内陸部は、野生ウマの主たる生息域だったため、その飼育に成功した人々が、ウマの活用を始めました。ウマを食用とする一方、乗馬して飼育動物の管理に活用しました。そして、ヒトに対する狩猟活動として、他部族から食糧などを掠奪する「狩り」を覚えたのです。「戦争」は、「狩猟」に包含されるヒトへの行為になりました。

モンゴル（蒙瓦）の場合、唐代（7世紀）にアムール川（黒龍江）上流のアルグン川（額爾古納河）付近の住民として初出し、「黒水靺鞨（こくすいまつかつ 黒龍江以東の遊牧民ではない人々）」と区別されていました。冬は極寒、短い夏だけ快温という気象条件で、中央アジアの交易ルート（Silk road）から外れた地域に暮らしていました。チンギス・ハン以前のモンゴルは、バイカル湖（Lake Baikal）周辺の河川流域で、遊牧生活をしていた部族の一つと考えられます。そのモンゴルが、バイカル湖南東のブルカン山（ブルカン・カルドゥン Burkhan Khaldun）に移動

した12世紀頃から、小部族単位のウルス（モンゴル語で「人々」または「国家」uls）は、抗争を経て統一されて行きました。

◆モンゴル帝国の侵略

13世紀初頭のモンゴルによる侵略は、チンギス・ハンの存命中に、中央アジアをほぼ勢力下に置きました。西に隣接していたナイマン（Naiman 10C頃 - 1218）を攻略すると、契丹系の西遼（Qara Khitai 1132 - 1218）を徴用ナイマン兵によって滅ぼしました。さらに南下し、コラズム（Khorazm 1077-1231）の都サマルカンド（Samarkand）を1220年に攻略、そのまま西進して、カスピ海西岸からヴォルガ川流域に至る地域に、大遠征しました（1221-24）。カラコルム（Karakorum）に帰還後は、現在の中国甘粛省付近にあった西夏（1038-1227）に侵攻、その遠征中にチンギス・ハンは病死したとされています。

チンギス・ハンの死後、モンゴルの侵略征服活動は、5代皇帝クビライ（Kublai Khan 1215-1294）の頃まで続きました。その間に滅亡または服属した主な国が、下表です。

モンゴル帝国による、極めて広範囲に及ぶ大規模な侵略は、モンゴルの単独行動だけでは成し得ませんでした。征服地の兵を徴用または扇動し、征服の連鎖が起こったことが、史上空前の大帝国に繋がったと言えます。

この侵略征服の過程で、約4,000万人が亡

■モンゴルの侵略

年	国名
1227	西夏（中国北西部）滅亡
1233	大真国（中国東北～沿海州）滅亡
1234	金（中国中北部）滅亡
1240	キエフ公国（ウクライナ）滅亡
1243	ノブゴロド公国（バルト海沿）服属
1249	チベット帰属
1254	大理国（中国内陸南部）滅亡
1258	アッバース朝（イラク～イラン）滅亡
1259	高麗（朝鮮半島）服属
1279	南宋（中国中南部）滅亡
1288	大越（ヴェトナム）服属

歴史研究

「近代」というシナプス

くなったとする試算があります。内訳は、西域を含む中国が3,500万人、中東・アラブ諸国が200万人、ロシアを中心にヨーロッパが50万人などです。13世紀の世界人口の推計値は、3億6千万人から4億人とみられることから、モンゴル帝国は、10人に1人以上の人命を奪った可能性があるということです。「近代」の価値観から見ると、この数値は、明らかな大量虐殺（genocide）です。

◆「タタールのくびき」

ヨーロッパ史上で、モンゴル帝国の直接の侵攻が記録されているのは、現在のロシアと東ヨーロッパです。現在のウクライナにあったキエフ公国（Kievan Rus 882頃-1240）などのルーシ諸国（Ruthenia）が滅亡し、1240年代に建国されたジョチ・ウルス（キプチャク・ハン国 Golden Horde 1240年代-1502）が、ヴォルガ川河畔のサライ（Sarai）を都として、ルーシー帯を支配しました。ロシア史上で「タタールのくびき（Tataro-Mongol Yoke）」とされる時代の始まりです。この間、ノブゴロド公国（Novgorod Republic 1136-1478）やスモレンスク公国（Principality of Smolensk 1054-1387）などの諸国が、モンゴルに服属しました。

「タタールのくびき」は、歴史学者の間で、さまざまな見解があります。異族により服属を強要された期間とする見方は、19世紀のロマノフ朝（House of Romanov 1613-1917）時代に示されたロシア史です。一方には、掠奪や殺戮は征服時に限られ、「平和（パクス・モンゴリカ Pax Mongolica）」が続いたとする見方があります。この期間にロシアの国家的基礎が整えられ、現在に至るロシアの領土拡張は、その基礎の上に可能だったとしています。ロシア史的な「タタール」は、自称他称を含めて、各地で長く有力者の地位を保ちました。「タタールのくびき」の解明には、各地域史の検証が必要なのです。

◆「東からの圧力」とペスト

ヨーロッパが「近代」に至る前史としてのモンゴル帝国は、ヨーロッパに対する「東からの圧力」だったことは事実です。モンゴルの侵略によって、少なくとも東ヨーロッパは荒廃し、ローマ教皇は、文書で服属を強要されました。西ヨーロッパへの軍事的な侵攻はなかったものの、モンゴルの圧力は、西ヨーロッパにまで及んでいました。

この時代、モンゴル勢力は、ヨーロッパにいくつかのモノをもたらしました。代表的なモノは火薬です（大航海時代の火薬の項で詳述）が、ここでは、ペストについて触れてお

「タタール」の定義

■どこのだれを指しているのか？

「タタール（Tatar）」は、意味が極めて曖昧な語です。欧米語の場合、モンゴルの侵攻から派生して、「地獄」「冥界」の意味を持ちますが、元々は東方に暮らす遊牧民または居住地域の曖昧な総称でした。

中国では明代に、モンゴルを含む遊牧民か居住地を総称して「韃靼（dádá）」という呼び名ができました。この語も、特定の地域や人々というより、異邦の遊牧民全体か居住地全体を曖昧に指しています。

“Tatar”の語源は古テュルク語で、「他の人々」を指すとする見解があります。アラブ諸語にも類似の語があり、主にモンゴルを指すとしています。

「タタール」を歴史用語として使う場合、地理上の地域を特定した使用法は、適切とは言えません。また、特定の人種を指す使用法も、モンゴロイドとコーカソイドの混血の濃淡が多様すぎて、一律に括することはできないのです。

“Tatar”の原義が、「よそ者」を指すかどうかは定かではありません。また、他称名詞としての歴史は、黒海周辺から黒龍江に至る広大な地域の多様な人々を、浮かび上がらせます。その中で、自らを“Tatar”と名乗る人々が現存する以上、遊牧民の文化を継承する人々の呼称として、受け入れることが適切と考えます。

歴史研究

「近代」というシナプス

きます。

中世ヨーロッパ最大の災厄と言えるペスト (la peste 当時は菌の認識はなく「流行性の疫病」の意) の大流行は、モンゴルがもたらしたとする説があります。その第一波は、1347 年にコンスタンティノープルで感染が始まり、1348 年から 51 年までに、ほぼヨーロッパ全域に流行が拡大しました。通説では、ヨーロッパ人口の 3 分の 1 から 4 分の 1 が失われたとされています。しかし、近年の研究では地域差が大きく、罹患率が高かったと推定されるイタリアでは、対人口死亡率が 50%~60% だったと試算されています。

ペストの流行は、その後も波状的にヨーロッパを襲い、長い景気後退を招きました。クマネズミなどからノミを介してヒトに感染すると言われ、致死率は極めて高いとされています。感染者が出たイタリアの村では、菌による感染という認識はないものの、全住民が村を放棄して逃避した事例がありました。

モンゴルの侵攻に始まった「東からの圧力」によって、14 世紀の西ヨーロッパは、軍事面だけでなく、ペストという社会的災厄の面でも縮小を余儀なくされました。モンゴルの影響力はその後、徐々に薄らいでいきます。しかし、オスマン・トルコの勢力拡大によって、「東からの圧力」は、さらに強まりました。その象徴的な出来事が、1453 年の東ローマ帝国滅亡と私たちは考えています。

ユーラシアという地続きの平面で、人々は、歴史に記録が残る以外にも、移動生活を送って来ました。ヨーロッパとオリエントの均衡ラインは、西ブレと東ブレの攻防を繰り返したと言えます。モンゴル帝国からオスマン・トルコにかけての時代は、明らかに均衡ラインが西ブレし、ヨーロッパは縮小しました。

そのヨーロッパが縮小した時代の、西ヨーロッパ各国の状態から見て行くことにしましょう。

ヨーロッパから見た東方世界

■オリエント (Orient)

“Orient” は本来、「太陽が昇る方向」を指す語とされています。そこから転じて、東ローマ帝国を含む東方世界を指す語になりました。「導き」の含意もあり、日が昇ることへの畏敬の念を含みます。異教徒のイスラム世界 (Islamic world) は、恐怖の対象でありながら、羨望の対象という側面も持っていました。西ヨーロッパに勝る文化力を備えた外世界 (External world) と認識されていました。

■幻の国 (Presbyter Johannes)

12 世紀頃のヨーロッパで、イスラム世界のさらに東に、幻のキリスト教国があるという噂が流布しました。「プレスター・ジョン」と呼ばれています。その幻の国が、苦境に立つヨーロッパを救うため、兵を差し向けて、イスラム勢力を撃退してくれるというのです。モンゴルのヨーロッパ侵攻は、「プレスター・ジョン」の命令によるのではないかと、考えた人々がいました。しかし、その実態は、ヨーロッパ世界がモンゴルに服属することを求めるもので、従わなければ滅ぼすという脅しでした。東アジアは、未認識の世界だったと言えます。

●「神の国」の現実

鐘

の音が、静かに村に鳴り渡っている。物悲し気にも聞こえるその音色は、一つの時代の終わりを告げているのかもしれない。村人は、長い沈滞からの新たな幕明けのように、鐘の音を聴いている。災厄と幸福は交互に訪れた。だが、神が授ける福音を信じることに、素直に向き合うことができた時代だったと思う。

ペストの大流行によって、ヨーロッパ人口が激減して以降、人口は増加に転じました。しかし、それは「回復」と見るのが妥当です。その状態に侵攻したオスマン・トルコは、東ローマ帝国を滅ぼし、バルカン地域を領有しました。滅亡に際してコンスタンティノープ

歴史研究

「近代」というシナプス

ルは、反ラテン（反ローマ）の意思を露わにしたまま、「ビザンツは、その罪をつぐなうために滅びなければならず、その再生は当然キリスト教世界の復活を示すだろう」と念じながら、1000年に及ぶ東ヨーロッパ世界の中核の歴史を締めくくりました。

◆15世紀後半の西ヨーロッパ

1453年の西ヨーロッパは、イギリスとフランスの百年戦争（Hundred Years' War 1339 - 1453）が、やっと終結したとはいえ、フランス国内は荒廃していました。敗れたイギリスでは、国内貴族を二分して対立するバラ戦争（War of the Roses 1455 - 85）が起こり、事態はさらに深刻でした。

ドイツでは、300もの諸侯が分立し、神聖ローマ帝国（Holy Roman Emperor）は、有名無実化していました。1438年に帝位についたハプスブルク家（Haus Habsburg）は、フリードリヒ3世（Friedrich III 1415-1493）以降、帝位世襲化を果たしますが、辺境伯や領邦公、司教公などの域内不協和は続いていました。加えて、フス戦争（Hussitenkriege 1420-36）以来、民衆の不満がくすぶってい

ました。その状況下で、東ローマ帝国を滅ぼしたオスマン勢力が、北上して来ました。外患は、やがてウィーン包囲（1529）に至り、内では、宗教改革（Reformation）とドイツ農民戦争（Deutscher Bauernkrieg 1524 - 25）の嵐が吹きすさぶことになりました。

イタリアでは、ヴェネツィア（Venezia）、フィレンツェ（Firenze）、ミラノ（Milano）などの都市的国家が分立し、領土や交易をめぐる利権争いを繰り返していました。しかし、東ローマ帝国支援が敗北に終わると、オスマンの脅威が現実のものになりました。対抗策として、フィレンツェ、ミラノ、ヴェネツィアは、教皇領（Status Pontificius）とナポリ（Napoli）を加えて、1454年に「ローデイの和（Pace di Lodi）」を結びました。その後40年間、イタリアに大きな争いがなく、「ルネサンス（Renaissance）」が隆盛となりました。しかし、1494年にイタリア戦争（Guerre d'Italia - 1559）が始まると、再び混乱の時代が訪れました。権謀渦巻く時代にマキャベリ（Niccolò Machiavelli 1469 - 1527）は、「結果さえよければ、手段は常に



歴史研究

「近代」というシナプス

正当化される」と書き残しました。

唯一の救いは、イベリア半島の「レコンキスタ (Reconquista)」が、イスラム勢力圏をグラナダ (Granada) 周辺を残すのみになったことくらいです。しかし、その地域も、戦争状態だったことに変わりはありません。

「大航海時代」については後述しますが、後のスペインの財政破綻体質は、すでに内在した状態でした。

このような西ヨーロッパの状態に対して、ローマ教会 (Roman Catholic) は、権威の失墜と世俗化による組織腐敗で、有効な「救いの手」を示せずにはいました。組織改革の必要性を幾度となく提起されながら、その体質を変えることができなかったのです。そして、財源を目的に「贖宥符 (Indulgence)」の発行に至ると、民衆ばかりではなく各国の王が、「教会位階 (Hierarchy)」への反旗を翻すようになりました。

◆西ヨーロッパの活路

ドイツ・イタリア以西の西ヨーロッパが、広大なユーラシアに占める領域は、けして広いとは言えません。大陸的に見れば西端領域に当たり、東方からの圧迫リスクは、地勢的に避けられないエリアと言えます。「東からの圧力」を押し返す力がなければ、圧迫され続け、縮小し続けるしかない地勢条件に置かれています。

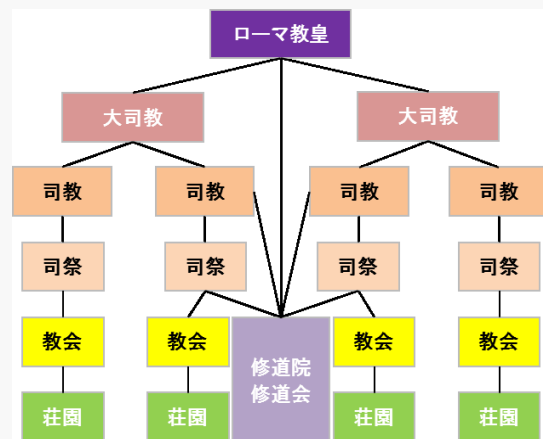
その西ヨーロッパは、ローマ教会の下で、理想社会としての「神の国」を目指していました。しかし、その現実には、連綿と続く対立と災厄に疲弊し、拡張どころか、風前の灯火に近い状態だったと言えます。

その収縮と荒廃の中、1453 年以降の西ヨーロッパは、経済的には好況、技術的には革新、文化的には復活の時代を迎えます。東ヨーロッパの核を失いながら、内部改革と高リスクを覚悟した外部世界への突破の試みにより、「近代」の扉をこじ開けて行くのです。

中世西ヨーロッパの世界観

■教会位階 (Hierarchy)

西ヨーロッパ「中世」の世界観は、基本的にはローマ・カトリック教会の世界観でした。王権との政教分離 (Separation of Church and State) による聖と俗の世界観と言えます。ローマ教皇 (Papa) を頂点に、大司教 (Archbishop) — 司教 (Bishop) — 司祭 (Priest) からなるピラミッド型の位階があり、「神の国」に導こうとするものです。修行、伝道、学術、農業労働などを担った修道院や修道会も、その傘下にありました。



キリスト教の聖性

■罪と愛 (Sin and Love)

キリスト教は、「愛」の宗教と言われています。その根底には、人の存在そのものを「罪」とする認識があり、その罪深さを悔い改めることで、神の「愛」に浴することができるとする教えです。

■三位一体 (Trinity)

ニカイア信条 (Nicene Creed) と呼ばれ、「父神 (ことば) ・子神 (イエス) ・精霊」を一体の神として崇拝する教義です。

■修道 (Trinity)

隠遁生活を起源とし、「禁欲・清貧・服従・労働」の共同生活に精励することで、神の領域に近づこうとする行為です。

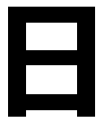
これらの聖性は、常に異端 (Heterodoxy) と世俗 (Common) の葛藤に苛まれました。

※注) 「レコンキスタ」は通常、「国土回復運動」と訳されます。この運動は、5世紀のゲルマン民族移動で、イベリア半島に移住した西ゴート族の領土を再征服しようとする運動です。単純な宗教的な領土回復とは言えず、その訳語をここでは「旧西ゴート領再征服運動」とします。

歴史研究

「近代」というシナプス

●同時代の日本の状況



本の1453年(享徳2年)は、室町時代中期に相当しています。

8代将軍の足利義政の時代で、14年後の1467年(応仁元年)には、応仁の乱が起こります。いわゆる「戦国時代」を間近にした頃で、日本史上で最も長い動乱期を目前にした時期になります。

応仁の乱から桶狭間の戦い(1560年)までの約100年間は、政治史的には「空白の100年」と言えます。「戦国時代」は、地方勢力の伸長に伴い、中央(京)の政治力が脆弱になった時代でした。「群雄割拠」ということばが当てられています。

戦国大名は、天領、公家領、寺社領などの「荘(Sou)」を領地化することで、「大名領国化(Feudalization by DAIMYO)」を図りました。「荘の番人=守護/地頭(Guard of Manor)」が「地域を治める主(Master of the Country)」にのし上がり、古いしきたり(律令制)を壊して行きました。数々の戦国ドラマは、結果的に荘園制にとどめを刺して行く時代の「革命」のドラマなのです。

しかし、地域条件が異なるため、その傾向は、一律ではありません。地域別の傾向として、次のように分類できます。

① 長門を含む西国地域

モンゴル襲来への反攻勢として始まった「倭寇」が、東アジア地域に活動範囲を広げて、中国大陸にも出沒した。その行為は、「海賊行為(Act of Piracy)」と「物品交易行為(Act of Trade)」の二刀流仕立てで、東アジア的「海洋貿易期」の一翼を担った。

② 越前、美濃、尾張を含む畿内周辺地域

権力をめぐる政治抗争の舞台となり、寺社、農民、商人を巻き込んだ戦乱が繰り返された。支配地をめぐる争い、農民の反乱、公家勢力の困窮、西国と東国の政

日本史の位相

■西国と東国

私たちが習う通常の日本史は、政治権力の拠点地域の歴史を中心に構成されています。時代変化の中で、その中心は、畿内→京→鎌倉→京→(尾張)→大阪→江戸→東京と、主に関西と関東を行き来しました。もちろん、他の地域にも固有の歴史がありました。関西と関東の「文化」のちがいがたびたび話題になるように、地域の歴史は、地域に固有の「文化」を育みました。

私たちは、日本の「文化」を二分する傾向が強い西国的位相と東国的位相を、日本史を考える視座の一つにしました。

西国的位相は、畿内から瀬戸内海を介して九州北部に至るルートを中心にした歴史です。朝鮮半島や中国大陸との交流が古くから盛んで、江戸時代以前は、東アジアに開かれた地域でした。交流が盛んな分だけ、大陸的な先進性の恩恵を受けたと同時に、外圧のリスクを抱えていました。

それに対して、東国的位相は、関東地方を中心とした歴史です。西国に比べて大陸との直接の交流は希薄で、地政条件として閉鎖的な地域でした。大陸的な外圧リスクが少ない分だけ安全な半面、東アジア的先進性との接触では劣っていました。

この地政条件のちがいで、西国と東国は、言語をはじめとする文化で、互いを異質とみなし合いました。各時代に直面した事象が異なるため、認識も異なるのです。特に室町後期の「戦国時代」は、西国と東国の時代認識が、全く異なると言って良いほど、かけ離れていました。

■北方と南方

北方と南方は、西国と東国の枠組みでは捉え切れない歴史を持っています。

東北地方以北の北方の歴史は、関東地方の勢力の影響を受けながら、北に行けば行くほど独立的です。北海道の明治時代以前は、ほぼ独自の歴史だったと言えます。

九州南部以南の歴史は、東シナ海の交易エリアの視点で見ると、日本史の枠組みとは異なります。特に琉球史は、国家形態を持つ歴史で、その制度や文化、交易活動は、独立しています。

歴史研究

「近代」というシナプス

治的ギャップの調整不全など、「中央機能」のマヒ状態が常態化した。

③ 甲斐、駿河を含む関東地域

列島外との接触が地政的に少なく、ある意味では閉鎖的なため、「関八州」が南北朝対立の名残りととどめながら、独自の勢力争いを演じた。その過程で、鎌倉府が滅び、非在来勢力の北条氏が台頭して行った。

④ 奥羽地域

対外環境は蝦夷島に限定され、実質的に関東の争いに影響されながら、南北朝対立の色合いを残す勢力争いを演じた。中東北以北では、鎌倉幕府以来の勢力が拮抗、半ば自立的に勢力争いをした。抗争は、他地域ほど複雑な関係にはならなかった。

⑤ 琉球地域

沖縄本島で勢力争いをしていた三山が、

尚氏によって統一され、「琉球王国」が誕生した。「琉球王国」は、東シナ海交易で栄え、奄美や薩摩などとの交流を盛にした。日本史で言う「戦国時代」の概念は、当てはまらない。

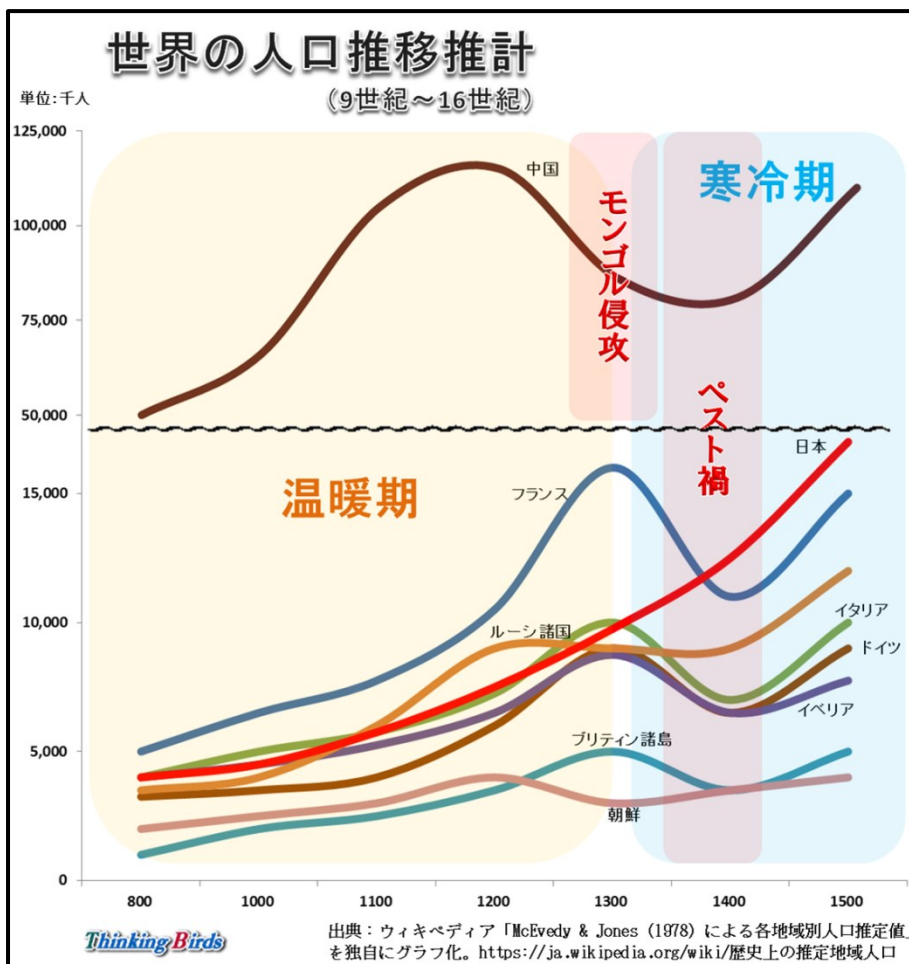
このような分権的現象（琉球を除く）は、ある意味では、北イタリアやドイツ諸侯の分立状態に相似しています。ローマ教皇—神聖ローマ皇帝—諸侯という権威構造が、機能不全に陥る状態は、天皇—代権者（摂関・将軍）—在郷者（国司・守護／地頭）の構造が、機能しなくなる状態と対比できるのです。

◆15世紀の環境変化

ヨーロッパと日本の影響関係が、時代的にほぼ考えられない中で、ヒトが作り出した政治システム、つまり一定の歴史的裏づけを持つ統治パターン（教会型領邦制・天皇制的律令制）が、この頃には機能不全に陥り、転換を促す状態に至ったと仮定できます。その大

きな要因は、第三層（諸侯・大名）の成長と分立です。第一層（教皇・天皇）が付与した第二層（皇帝・将軍）の権限が、第三層の成長で機能しなくなり、ピラミッド型の統治機構が、底辺から崩れて行く現象と言えます。

この現象の背景には、生活環境の変化が影響した可能性があります。ヨーロッパ中世中期に当たる9世紀から12世紀は、地球の気象環境が比較的温暖でした。続く13世紀から14世



歴史研究

「近代」というシナプス

紀は寒冷で、15世紀初頭に一時的に温暖化しますが、中葉以降は「シュペラー極小期」に入り、寒冷化したとされています。

この気象環境変化は、生態系に影響を及ぼしたと考えられています。中世温暖期には、北半球の高緯度地域まで植生が豊かになり、耕作適地が広がりました。また、動物性の食糧資源も比較的豊富になりました。ヨーロッパや東アジアの人口増加を、気象要因に単純化することはできませんが、ヨーロッパ中世に対する「暗黒時代 (Dark Ages)」への異論は、食糧面での豊かさが一因と言えます。

13世紀に入ると、モンゴルの侵攻により中国の人口が減少、14世紀には、北アフリカのエジプトなどでも、異常気象が記録されるようになりました。加えて、世界的なペストの流行で、ヨーロッパだけでなく、中国や朝鮮半島でも人口は激減しました。その影響を免れたのは、日本やインドなどの限られた地域でした。人口面の15世紀は、その回復局面に入った時期です。しかし、人口増加に見合う食糧確保は、環境や技術、習慣など多面的な要因で、バランスが崩れて行くのです。

◆室町時代の社会構造変化

日本の室町時代は、経済活動の飛躍的な発展と慢性的な食糧不足の時代でした。農業技術の一定の発展があり、増産の結果、人口が増加し、それが食糧需要を押し上げて経済活動（座）が発展した半面、供給不足を招きました。農産物の収量は、労働と気象に左右されるため、需給バランスの不安定化は、社会不安を招きました。農民は、不在地主（荘園領主）への租税の納税を放棄する傾向を強め、在地統治者（守護または土豪）ぐるみの分国共同体ができて行きました。また、自衛的な武装化が進んで、半農半武層を形成して行きました。

室町時代は、飢饉が多発した時代とする研究があります。気象要因として大雨などによ

■1500年頃の日本の人口

	国名	人口(人)	人口密度 (人/k m ²)
畿内	山城国	475,000	6,499
	大和国	338,000	1,678
	河内国	118,000	2,696
	和泉国	89,000	2,677
	摂津国	263,000	2,810
東海道	伊勢国	260,000	1,125
	尾張国	156,000	1,503
	三河国	142,000	679
	遠江国	124,000	635
	駿河国	118,000	535
	甲斐国	117,000	403
	伊豆国	37,000	350
	相模国	118,000	918
	武蔵国	451,000	1,153
	上総国	177,000	1,262
	下総国	229,000	1,112
	近江国	306,000	1,190
東山道	美濃国	258,000	641
	飛騨国	29,000	109
	信濃国	262,000	307
	下野国	216,000	526
	陸奥国	643,000	217
	出羽国	325,000	252
	若狭国	29,000	535
北陸道	越前国	146,000	671
	加賀国	83,000	562
	越後国	222,000	290
山陽道	播磨国	276,000	1,157
	備前国	121,000	1,291
	周防国	107,000	566
	長門国	78,000	388
南海道	淡路国	37,000	1,033
	讃岐国	140,000	1,231
	伊予国	179,000	525
	土佐国	124,000	273
西海道	筑後国	99,533	1,230
	豊後国	171,000	498
	肥後国	230,000	471
	日向国	83,000	163
	大隅国	48,000	196
	薩摩国	69,000	208
	対馬国	5,000	126
全 国		11,064,000	841

※注) 鬼頭宏氏が試算した1150年と1600年間の推定人口から単年増加数を導き、期間年数を掛けた。摂津(大坂)、武蔵(江戸)など1500年以降の特殊増加国は、単年増加数を按分で減じた。

歴史研究

「近代」というシナプス

る農業被害が、多発したとしています。しかし、平常年の端境期（春から初夏）に、農村での死者が増える傾向から、農業生産量は人口増加分を賄えず、不足が慢性化していました。地球環境の寒冷化が飢饉を多発させたとしても、食糧生産量と人口増加の需給バランスは、常時不均衡でした。また、1498年（明応7年）の明応地震（東海地方などで大被害、旧浜名湖付近は地盤沈下で集落水没）のような災害による被害地域では、流通拠点だった安濃津（現在の三重県津市）の再建が放棄されました。社会構造の変化は、自然環境要因と社会環境（人的）要因で起こったのです。

そうした中、土地領有の構図が極めて複雑で、人口集中が進んだ畿内では、土地利権をめぐる離合集散の争いが繰り返されました。公家領、寺社領、武家領の荘園がまだら模様に混在し、室町幕府官職や南朝遺恨との確執など、多様な要素が入り組んでいました。中でも商人層の蓄財は、日本的「近代」の萌芽でした。畿内勢力が、いわゆる「戦国大名」として広い領域を支配できなかったのは、細分化された荘園利権と新時代の利権が、複雑に交錯し、一定範囲を領国化しようにも、反発が必須の構図があったためでしょう。

地方では荘園制が崩壊し、大名領国化が進行する状況にも関わらず、畿内では、荘園既

得権に固執する勢力が、小者分立の争いに終始しました。地方荘園からの租税が滞りがちになった領主（公家など）にとって、畿内荘園の保持は死活問題です。しかし、その荘園防衛戦は、農民の土一揆や国一揆、商人層による金融経済の浸透で、利権保持が難しくなりました。そのため、室町将軍は「徳政」と銘打って民衆に租税を猶予しますが、旧守派は当然反発、荘園守護を旨とする将軍は、ともに京にいられず、大局に立つべき中央政府の機能を失って行きました。

◆荘園制から領国制への移行

戦国時代を通じて、荘園制の徴税システムは、ほぼ崩壊して行きます。それは、室町将軍の統治能力や個人的な政治資質などに、責任転嫁できる問題ではありません。京と鎌倉の二重権力の解消を目指した室町幕府は、半身を荘園制に依存したまま、時代環境の変化に直面しました。富の分配が、荘園領主から商人や在地有力者に移行し、その変化に対応した政治変革が必要でした。しかし、既得権まみれの京からでは、無理があったのです。

一方、領国大名には、直営領国と直営領民の意識が芽生えました。食糧不足問題に直面する領民を前に、荘園制の堅持が困難なことを痛感した領国では、その復古を積極的に推進し、富の蓄積を図りました。このような領国性共同体管理システム（領土支配を含む領民管理システム＝脱荘園権益システム）への移行は、同時代のイギリスで起きた「囲い込み(Enclose)」後の農村共同体企業と、似通った要素を持っているのです。

なお、この時代の九州をはじめとする西国の状況は、大航海時代の「倭寇」の項で詳述します。また、鎌倉府が滅亡以降の関東地方の状況は、今川氏、武田氏、上杉氏、北条氏の動きが基本ベースになりますが、詳細を割愛します。奥羽の抗争は、「近代」のテーマから逸れるため、ここでは言及しません。

日野富子・再考

足利義政の正妻・日野富子は、「日本三大悪女」の一人とされています。その悪評を招いた要因の一つが、京に入る人々に関銭を課し、私利化したとするものです。当時、京に流入した人々の悪行ぶりは、目に余るほどでした。一揆して強訴、蔵を襲う強奪、スラムの形成、物乞いと、京の治安は悪化の一途を辿りました。その状況下での関銭は、政策としては妥当です。ヨーロッパ諸都市の入城税と対比し、正當に評価されるべきです。

歴史研究

「近代」というシナプス

●「都市」と「農村」

西

ヨーロッパに夜明けを告げたとされる「近代」の始まりは、次のような歴史的現象を抽出して、シンボル化するのが一般的です。

- ① イタリアに始まるルネサンス
- ② ポルトガル・スペインの海洋航路開拓
- ③ ドイツで盛り上がった宗教改革運動

これに加えて、次のような出来事を追記することもあります。

- ④ コペルニクスの地動説
- ⑤ グーテンベルクの活版印刷

それぞれの現象や出来事を、「近代」の始まりとみなすことには、妥当性があります。中世の価値観を覆したという意味で、「革命」の始まりと言えます。

しかし、ここでは、もう少し掘り下げた歴史的現象から、「近代」の始まりについて考

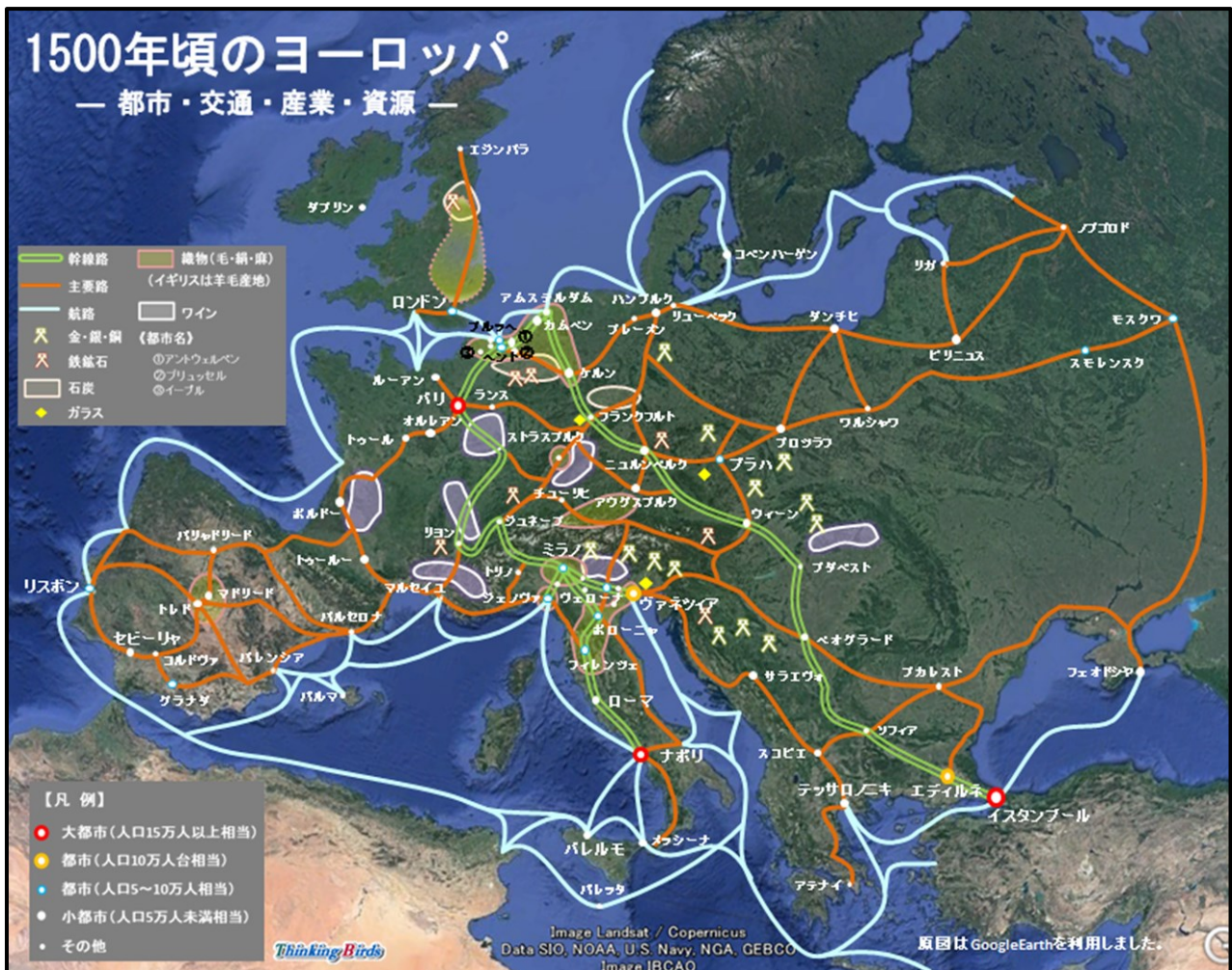
察してみます。

15世紀中頃の西ヨーロッパ史で、欠かすことができない要素の一つが、「都市 (City)」です。「都市」とは言っても、人口数千人規模の街状地区が大半ですが、教会や王権とは異なるフィールドで、ヨーロッパ史上で大きな役割を果たしました。そのフィールドとは、言うまでもなく経済活動です。

一方、「農村」は、食糧供給にとって不可欠なフィールドです。「中世農業革命」と呼ばれる三圃農法 (Three fields system) の普及で、麦類を中心とした穀物生産量が増加しますが、戦乱と疫病で荒廃が見られました。また、いわゆる「封建制 (Feudalism)」の下で、領主 (lord) と領民 (農奴 villain) の主従関係は、温存されていました。

◆「都市」と「農村」の需給バランス

「都市」は、商工業の発展に貢献したこと



歴史研究

「近代」というシナプス

は確かです。しかし、「都市」の発展は、食糧問題を深刻なものにしました。15～16世紀のヨーロッパの人口は、ペスト大流行の余波に喘ぎながらも、基本的には増加し、景気は浮揚傾向でした。しかし、人口増加に対する穀物生産量は、寒冷化する気象条件の中で、伸び悩みました。食糧源となる動物個体数は、植生変化と乱獲などで減少し、肉食消費量は、1550年頃をピークに落ち込んで行ったとされています。

ヨーロッパの食糧問題は、農村のキャパシティと連動しています。三圃農法は、穀物生産量を増大させますが、休耕地があって効率が悪く、後の「農業革命」のような品種改良を伴わないため、一定の限界がありました。教会や領主への納税義務を負う農村には、必然的に人口許容範囲がありました。そのため、「封建制下で農民は搾取に苦しみ、自由を求めた」などと説明されている「都市」への人口移動には、安全弁のような側面がありました。「都市」側の職人需要や兵員需要を、農村側の余剰人員が補うのです。「都市」の人材需要が高まると、農村は労働力不足に陥り、「都市」が人員過剰になると、農村は耕地不足と余剰人口を抱えるという関係です。

15世紀中頃の南ネーデルラントで、貧民調査をした記録が残されています。それによると、農村部では、約25%の農民が貧困状態だったとしています。それに対して、「都市」の貧困率は80%を超えていました。徴税ラインに達しないそれら人々は、治安を乱す者（無法者、大酒飲みなど）になり、社会問題化して行きました。つまり、この時期の「都市」と農村の人材需給バランスは、「都市」側が過剰（仕事に対する人の過剰＝無職浮浪民の増加）という状態でした。このため「都市」は、16世紀に入った頃から、「貧民救済（Subventionne Pauperum）」なる名目で、人口流入規制を進めるようになりました。

南ネーデルラントのイーブル（Ieper）では、1520年代から教会が中心になり、貧民の救済と不審者の処罰を含めて、流入規制の条例を制定しました。

このような事例が、北ヨーロッパ各都市に広がりました。その結果、農村から「都市」への人口移動が難しくなりました。「都市」の好況が人を集めた結果、人員余剰が生まれ、流入制限された農村が、余剰な人々を抱えるという構図です。寒冷化で食糧生産量が伸び悩む中、ドイツの農村では、小規模ながらも開墾が進み、自営農民が広がりを見せます。そこに領主による徴税圧力が加わると、農民は、領主特権からの自立を求めて、不満を暴発させました。その事例の一つが、1525年に起こったドイツ農民戦争です。

なお、ドイツでは1500年頃から、「乞食」が問題視されるようになりました。流浪民は、第一次エンクロージャー期のイギリスでも、問題視されました。この点については、「ロマ（ジプシー）」などを含めて、後述することにします。

◆環境要因の類似性

このようなヨーロッパの状態は、日本の室町時代と極めて類似しています。同時期の日本では、食糧難に陥った農民が京に押し掛けて強訴したり、一揆して難状の打開を訴えたほか、傭兵に近い「足輕」層を生み出しました。また、脱落して路上生活者（いわゆる「河原者」）となった人々が、下層を形成して行きました。影響関係のないヨーロッパと日本で、ほぼ同時期に起こったこの現象は、寒冷化という環境変化の中で、ユーラシア的人類が迎えた状態を暗示しています。

「人口増加と食糧不足」という環境要因を共有したヨーロッパと日本は、その後、異なる「歴史」を歩みます。その差異を検証するためには、その「歴史」の構造を見て行くしかないのです。

【出典及び参考文献】

- ・歴史学研究会編『世界史年表 第2版』（2001年12月、岩波書店）
- ・日本歴史大辞典編集委員会編『日本史年表 増補新版第1刷』（1984年10月、河出書房新社）
- ・山川堅太郎ほか編『世界史小辞典』（1972年、山川出版社）
- ・村川堅太郎ほか著『世界史地図』（1983年3月、第23刷、山川出版社）
- ・野村正七ほか編著『世界地図帳』（1985年1月、第7刷、昭文社）
- ・桑名一博編『西和中辞典』（1987年2月、小学館）
- ・福井毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』（1989年、旺文社）
- ・国松孝二編『独和大辞典』（1990年1月、小学館）
- ・岩崎民平／小稲義男監修『新英和中辞典』（1977年、研究社）
- ・ジョーゼフT・シンプリー著、梅田修ほか訳『シンプリー英語語源辞典』（2011年3月、2刷、大修館書店）
- ・水谷智洋編『改訂版 羅和辞典』（2009年3月、研究社）
- ・フェルナン・ブローデル著、村上光彦訳『物質文明・経済・資本主義 15－18世紀 日常性の構造1～2』（1985年11月～1986年3月、第2刷、みすず書房）

◆始まるためのユーラシア的条件

◎すべてはモンゴル帝国に始まる

- ・宮脇淳子著『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで（増補新版）』（『刀水歴史全書59』、2018年10月、刀水書房）
- ・Wikipedia「モンゴル帝国」（2019年2月25日閲覧）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/モンゴル帝国>
- ・googlemap「ブルカン・カルドゥン」（2019年2月25日閲覧）
<https://www.google.co.jp/maps/ブルカン・カルドゥン>
- ・江上波夫著『騎馬民族国家 日本古代史へのアプローチ』（中公新書、1986年3月、45版、中央公論社）
- ・吉田順一著「遊牧民にとっての自然の領有」（『シリーズ世界史への問い1「歴史における自然」』、1989年12月、岩波書店）
- ・佐藤洋一郎著『食の人類史 ユーラシアの狩猟・採集、農耕、遊牧』（中公新書、2016年3月、中央公論新社）
- ・島崎美代子、長沢孝司編著『モンゴルの家族とコミュニティ開発』（1999年7月、日本経済評論社）
- ・島崎美代子著「遊牧社会・モンゴル国の食文化」（成長科学協会 第19回公開シンポジウム『子どもの食生活と心の発達』抄録、2006年6月、公益財団法人成長科学協会）
http://www.fgs.or.jp/symposium/past_symposium/from2001.html
- ・今岡良子著「モンゴルの遊牧社会の変容—資源をめぐる紛争予防の観点から—」（『IPSHU 研究報告シリーズ 35号「資源管理をめぐる紛争の予防と解決」』、2005年11月、広島大学学術情報リポジトリ）
http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/list/HU_journals/AA11468178/-/35
- ・デヴィッド・W・アンソニー著、東郷えりか訳『馬・車輪・言語 文明はどこで誕生したのか（上）（下）』（2018年5月、筑摩書房）
- ・Wikipedia「チンギス・カン」（2019年2月25日閲覧）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/チンギス・カン>
- ・Selected Death Tolls for Wars, Massacres and Atrocities Before the 20th Century “Genghis Khan”（2019年2月25日閲覧）
<http://necrometrics.com/pre1700a.htm#Mongol>
- ・海老沢哲雄著「西欧とモンゴル帝国」（『シリーズ世界史への問い3「移動と交流」』、1990年4月、岩波書店）
- ・Wikipedia「タタールのくびき」（2019年2月25日閲覧）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/タタールのくびき>
- ・Wikipedia「パクス・モンゴリカ」（2019年2月25日閲覧）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/パクス・モンゴリカ>
- ・安田喜憲著「ペスト大流行」（『講座 文明と環境「第7巻 人口・疫病・災害 II. 疫病と文明」』（2008年8月、朝倉書店）
- ・石坂尚武著『苦難と心性 イタリア・ルネサンス期の黒死病』（2018年3月、刀水書房）

歴史研究

「近代」というシナプス

●「神の国」の現実

- ・エレーヌ・アルヴェレール著、尚樹啓太郎訳『ビザンツ帝国の政治的イデオロギー』（1989年2月、東海大学出版会）
- ・ゲオルク・シュタトミュラー著、矢田俊隆解題、丹後杏一訳『ハプスブルク帝国史 中世から1918年まで』（人間科学叢書15、1989年5月、刀水書房）
- ・Wikipedia「ローディの和」（2019年3月10日閲覧）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/ローディの和>
- ・Wikipedia「イタリア戦争」（2019年3月10日閲覧）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/イタリア戦争>
- ・塩野七生著『マキアヴェッリ語録』（2003年7月、新潮社）
- ・鈴木康久著『西ゴート王国の遺産 近代スペイン成立への歴史』（中公新書1283、1996年1月、中央公論社）
- ・小嶋潤著『西洋教会史』（人間科学叢書9、1986年9月、刀水書房）

●同時代の日本の状況

- ・Wikipedia「歴史上の推定地域人口 McEvedy & Jones (1978) による各地域別人口推定値」（2019年3月10日閲覧）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/歴史上の推定地域人口>
- ・鬼頭宏著「明治以前日本の地域人口」（『上智経済論集』、1996年、上智大学）
- ・内嶋善兵衛著「異常気象と文明」（『講座 文明と環境「第7巻 人口・疫病・災害 I. 自然の猛威と文明」』（2008年8月、朝倉書店）
- ・長谷部史彦著「14世紀エジプト社会と異常気象・飢饉・疫病・人口激減」（『シリーズ世界史への問い3「移動と交流」』、1990年4月、岩波書店）
- ・田上善夫著「小氷期初期の東アジアの気候変動」（2015年、富山大学『人間発達科学部紀要』第9巻第2号』、富山大学）
- ・飯田汲事著「明応7年8月25日（1498年9月20日）の震害と震度分布」（『愛知工業大学研究報告 No.15』、1980年）
- ・蔵持重裕著『中世 村の歴史語り—湖国「共和国」の形成史』（2002年9月、吉川弘文館）

●「都市」と「農村」

- ・河原温著「中世末期における貧困と都市の社会生活—イーブル改革を中心として—」（歴史学研究会編『歴史学研究 NO.587』、1988年11月、青木書店）
- ・ペーター・ブリックレ著、前間良爾・田中真造訳『1525年の革命 ドイツ農民戦争の社会構造史的研究』（人間科学叢書12、1998年1月、刀水書房）

ローマの落日

神々からの伝言

●都市への回路 I

歴史の各時代を先進的に担う「文明 (Civilization)」が発展した地域には、権力者の威光に引き寄せられるように、人々が集まりました。「都市 (Uru=英語の“urban”の祖語)」と呼ばれました。

日本語の「都市」は、明治維新以降にできたことばのため、15世紀段階の日本に即すと、「都 (Miyako)」に相当するのでしょうか。当時の日本で「都=Uru」は、現在の京都だけでした。ヨーロッパでは、ラテン語の「都市 (Urbs ウルビス)」は主にローマ市を指し、ほかには、東方の中心を担い続けたコンスタンティノープル (現在のイスタンブール) が該当すると考えられます。

「都市 (urban)」に対して、英語では「都市 (city)」と「都市 (police)」という二語があります。前者は、ラテン語の“Civis (市民)”から派生したと言われ、「市民権を持つ人々」が集まった場所というニュアンスです。後者は、ギリシャ語の“polis (都市国家)”が起源とされ、「守るべき規則がある街」から「警察」や「政治 (politics)」が派生しました。ちなみに「パリ (Paris)」は“polis”に由来し、発祥域とされる「シテ (Cité) 島」は“Civis”が源で、“city”に繋がります。

“city”“police”に対応する日本語は、「町 (Machi)」に近いと言えます。「町」は、「区画を表す単位」から始まったとされ、例えば「都 (みやこ)」の一区画が該当しています。「村 (Mura) =群れ=集まり=集落」が、形態の規則性とは無関係なのに対し、「町」は、一定の規則性 (例えば碁盤目状) がある各区画を指しています。建設に際しての物理

的計画性は、「村」より「町」が高く、恣意的要素は「村」が高い傾向にあると言えます。

日本では、16世紀に入った頃から、京以外の「町」が発達しました。西日本を中心に、博多、尾道、兵庫、堺など商業活動を中心とした「町」、山口、府内 (大分) など大名の行政館を中心にした「町」が形成されました。これらの「町」は、大名領国化が最終段階を迎える頃には、「城 (Shiro=castle)」が築かれるようになり、その「城下」に集約される傾向を強めて行きました。商人の「町」は、基本的に大名の統制下に入りました。大名が商業資本家を兼ねるケースは、日本では江戸時代までに姿を消しました。

ここで取り上げる西ヨーロッパの「都市」は、概ね“city”です。「市民街区 (city block)」と言えるそのエリアは、「近代」に重要な役割を果たすことになりました。

◆北イタリアの諸都市

ヨーロッパの中世都市は、大きく分けて二つのパターンに分類されます。

① 商業金融都市 (Financial city)

北イタリアのヴェネツィア、ジェノヴァ、フィレンツェ、ミラノなどを中心に、主に金融商取引で栄えた都市。イスラム圏との地中海貿易を担った。

② 手工業都市 (Handicraft city)

中世以来の各地で栄えた手工業を母体とした都市。職人組合が作られるほど職業分化を生み、織物や醸造、各種の細工などの製造業が盛んだった。

ここではまず、「商業金融都市」から考察して行きます。

北イタリアでは、領主 (主に司教) から自治権を持つ「地域=コムーネ (Comune)」が独自の発展を遂げ、ヴェネツィア、フィレンツェ、ジェノヴァ、ミラノのような「都市」が生まれました。「コムーネ」は、「町」周辺の農村地帯を指す「コンタード (Contado)」

歴史研究

「近代」というシナプス

を含む概念です。現在の日本の市町村のような、基礎自治体的な半都市国家でした。ヴェネツィアやジェノヴァのような海洋都市は、地中海交易を担い、その交易拠点として、地中海から黒海沿岸部に、植民市 (colony) のような領地を確保して、城郭を建設しました。東ローマ帝国がラテン人を嫌った背景には、十字軍と合わせて、このような侵略的な植民活動があったと言えます。

「コムーネ」の統治者は、フィレンツェでは「統治者＝シニョーレ (Signore)」または「大公＝グランドゥカ (Granduca)」、ヴェネツィアやジェノヴァでは「元首＝ドージェ (Doge)」と呼ばれました。その統治権をめぐって、主導権争いをしたケースもありました。有力者の大半は商人で、行政権を得るために軍事力 (傭兵) を備え、町政運営に当たりました。ヴェネツィアやジェノヴァでは、統治者を互選する共和制 (Repubblica)、フィレンツェのメディチ家 (Medici) やミラノのヴィスコンティ家 (Visconti) は、世襲統治を図りました。

イタリア商人が熱心に取り組んだのは、主に銀をベースにした金融取引でした。その背景には、領主への地代 (税) の金納の浸透がありました。そのため、大量に出回る貨幣を管理する仕組みとして、「銀行 (bank)」が誕生しました。ヨーロッパ最古の銀行とされるジェノヴァ銀行 (Banco di San Giorgio) は、12 世紀中頃に生まれ、ジェノヴァの統治権を握るまでに成長、15 世紀には各国国王への融資を行いました。フィレンツェのメディチ家の場合、15 世紀中頃にローマ教皇庁の御用銀行になったことが、繁栄の礎になりました。

◆商業の文書化

ヨーロッパ世界がアラビア数字 (Arabic numerals) を本格的に使い始めたのは、15 世紀頃と考えられています。東ローマ帝国が

山の小さな共和国

イタリア半島中部の山稜地域に、小さな共和国があります。サンマリノ (San Marino)。人口 3 万人余りの世界で 5 番目に小さなこの国の歴史は、4 世紀まで遡ると伝えられています。

ローマ皇帝のキリスト教徒への迫害を逃れて、石工のマリーノ (Marino) という人物が、信徒を集め、この地域の山にたてこもったのが、国の始まりとされています。以来、天然の要塞が外敵の侵入を困難にし、共和制を維持したまま、独立を貫いて来ました。19 世紀のイタリア統一戦争に際して、統一に奮闘したガリバルディ (Giuseppe Garibaldi) をかくまった時期があったため、独立を維持できたと伝えられています。

サンマリノの「コムーネ」は、ヴェネツィアやジェノヴァのような商業共同体というより、宗教共同体の性質が強いと言えます。拡大解釈をすれば、「コムーネ」自体が一つの修道院です。

このように、イタリア半島の「コムーネ」は、それぞれが固有の性質を帯びて、形成されたと言えます。

守っていたユークリッド (Euclid) やアルキメデス (Archimedes) 以来のギリシャ幾何学 (Geometry) に、アラビア数学の知見を加えた数理科学 (Mathematical Sciences) は、15 世紀のヨーロッパにとっては、高度な「科学 (Science)」だったと言えます。その高度な「科学」に触れる機会は、イタリアが先行していました。

アラビア数字の活用が、数学にもたらした革新性は、インド発祥とされる「ゼロ」の導入だったと言われています。「ゼロ」は、概念としてはヨーロッパや中国にもあったと考えられますが、数学的な概念というより、

歴史研究

「近代」というシナプス

めに数値化された価値は、富を数値化させます。税の金納は、貨幣市場経済を加速させますが、価値変動の副作用を生みました。

◆金融取引の基礎

メディチ家の繁栄は、15世紀末に破綻して行きます。一般的には、16世紀の「価格革命（Price revolution）」の影響と考えられていますが、イタリア戦争の混乱や貸付の不良債権化、「市」の収支の悪化など、その要因は単純ではありません。結果的にその支店網は、次々に閉鎖に追い込まれ、そこに追い討ちを掛けるように、「価格革命」の波が押し寄せました。それに伴い、メディチ家と命運を共にするように、フィレンツェは、歴史の第一線から姿を消して行きました。

イタリア商人が編み出した手法は、その後オランダ商人に継承され、イギリスの産業資本家の手で発展、今日のアメリカ的金融資本主義（Finance Capitalism）にも息づいています。紙上の取引がネット上の取引に変わったとしても、それが信用取引を基本にしている点では、何も変わっていないのです。そして、金融取引の盛衰が「都市」の盛衰を物語

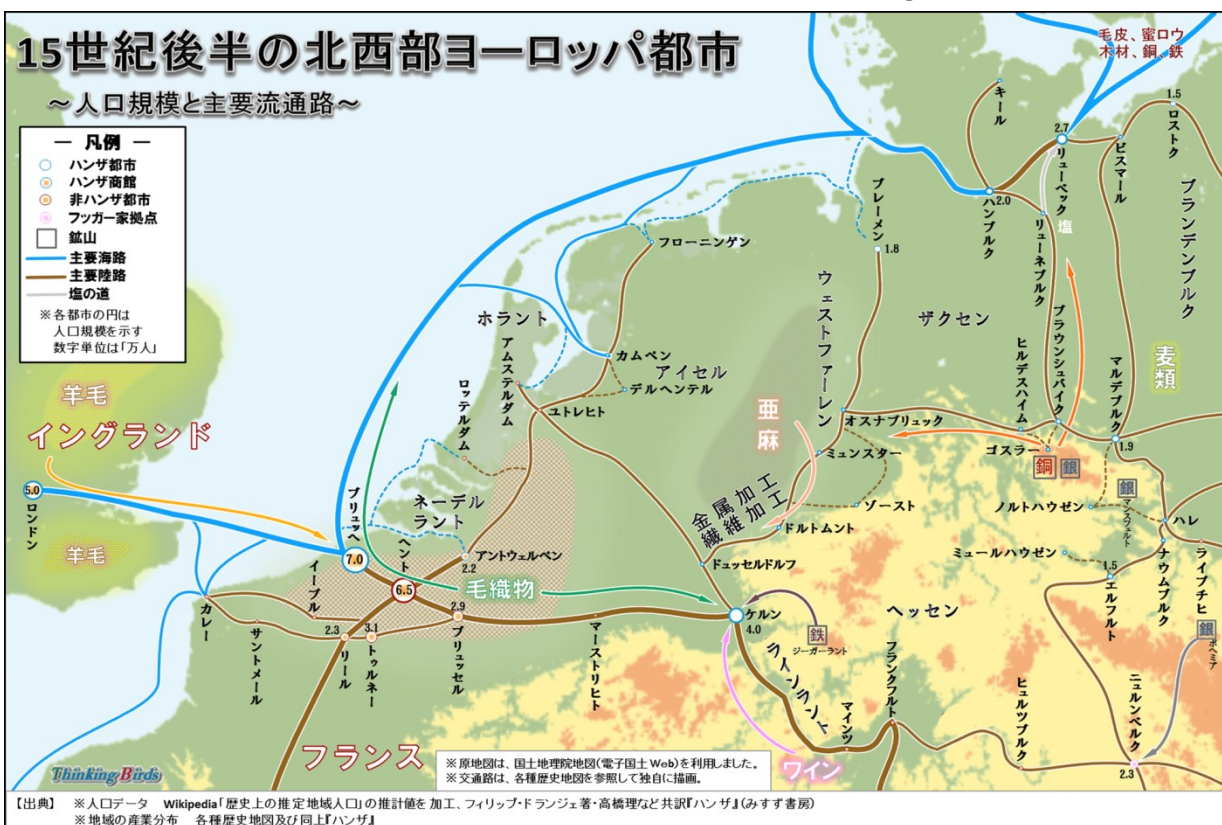
るという風潮も、今日の世界まで引き継がれています。

●都市への回路 II

現

在のフランスやドイツ、ベネルクス3国やイギリスなどの北西ヨーロッパ地域は、ローマを中心とした世界観から見ると、辺境（Marginal Land）に位置する地域でした。中でもバルト海（Baltic sea）から北海（North sea）沿岸にかけての地域は、中世ヨーロッパで一大経済圏を築いたとされるものの、北辺に近い認識だったと言えます。その町々の大半は、人口規模が数千人程度だったと推計され、2万人を超えると「大都市」に分類されるほど、小規模な「町」が点在する地域でした。

リューベック（Lübeck）を盟主とする、いわゆる「ハンザ同盟都市（Hansestadt）」が最も栄えたのは14世紀で、15世紀には衰退に向かったと考えられています。この「同盟」の実態は、国家権力なき経済連携ネットワークと言えますが、現在のロシア領内にあるノブゴロド（Novgorod）から、リューベ



歴史研究

「近代」というシナプス

ックを経てロンドン（London）に至る海洋東西交易を、主導的に担ったとされています。最盛期には150以上の「町」が加盟していたとされ、南の地中海交易と対比される交易活動を展開しました。

この東西交易の基本的な構造は、北東ヨーロッパまたは北欧の物資を、ネーデルラントを中心とした北西ヨーロッパに送る「東から西への物流」が、主流だったと考えられています。ノブゴロドを起点とした東からの商品は、毛皮、蜜ロウ（照明用ロウ）、木材などが挙げられます。イスラム商人と取引する南ヨーロッパの地中海交易と質が異なり、商館を通じた取引でした。北欧から入る鉄や銅の鉱山資源は、移住鉱山開発技術者がもたらした産品でした。ドイツ人の東方植民が進むと、プロイセン（Preußen）などから麦類が供給されました。

それに対して、「西から東への物流」は、ネーデルラント産の毛織物が、最も多く取引されました。ネーデルラントの毛織物産業は、後の産業革命の原点とみなせるものです。また、北東ヨーロッパでほとんど産出しない塩が、リューネブルク（Lüneburg）や西部フランスなどから、リューベックを介して北東ヨーロッパに供給されました。

◆ネーデルラントと毛織物

パリ以北のヨーロッパで、経済的に最も発達していた地域がネーデルラントです。人口5万人を超すブリュッヘ（Brugge ブリュージュ）とヘント（Gent ガン）を中心に、ブリュッセル（Bruxelles）、アントウェルペン（Antwerpen）、イーブル（Ieper）などの「町」がありました。百年戦争時代は、基本的には反フランス勢力の一員で、イングランドと友好的な地域でした。しかし、統治していたブルゴーニュ公国（État bourguignon 1031 - 1477）が、戦争末期にフランスと同盟したことで、長い戦争の幕引きを呼びました。その

ブルゴーニュ公国が、15世紀後半に断絶すると、域内は17州（伯領など）に分立、ハプスブルク家の統治下に入りました。

ネーデルラントの主要産業は、何と言っても毛織物です。原材料の羊毛をイングランドから輸入し、加工して販売することで、富が蓄積しました。ハンザとは同盟関係になかったものの、ブリュッヘに商館（後にアントウェルペンに移転）があり、海路で北ドイツ方面に輸出されました。また、陸路でパリ方面やケルン方面に出荷されました。毛織物の需要は、各方面共に極めて高く、イングランドでは第一次「囲い込み（Enclosure）」が起こることになりました。

毛織物の需要は、北方由来の毛皮に代わる防寒用衣類として、飛躍的に拡大したと考えられます。皮製品は、動物の殺傷を伴い、動物資源が減少すると、必然的に供給量が減少します。それに対して羊毛は、羊の殺傷を伴わないため、一匹の羊で複数回の再生産が可能です。そのため、羊毛の加工技術が高まると、需要の伸びしろが、単なるセーターからウール製品へと、段階的に拡張して行ったと言えます。

このモノを加工する技術の進化が、イタリア諸都市を追い抜く原動力になるのです。いわゆる付加価値（Added value）を生む技術は、今日の産業社会の中でも、重要な要素の一つとされています。

◆「自由都市」と神聖ローマ皇帝

北ヨーロッパの「町」は、中世史上で「自由都市（Freistadt）」と呼ばれるケースが多くあります。「Stadtluft macht frei.（都市の空気は自由にする）」ということわざがあるように、「都市」は、封建的束縛から解放される場所になりました。ただ、人口400人規模の「都市」がある一方で、人口1,000人規模の「村」という区分けは、現代の感覚からすると、やや奇っ怪です。神聖ローマ

歴史研究

「近代」というシナプス

皇帝（Kaiser der Römer）は、域内の「町」に積極的に都市権（Stadtrecht）を与えたと言われ、その数は約 3,000 に上りました。形式的には、イタリアやフランスを凌ぐ「都市」を抱えた国家だったことになります。マルデブルク法（Magdeburger Recht）という法律まで定め、「都市」の特権の保護に努めました。

神聖ローマ帝国は、領内に多数の領主が散在する領邦国家（Territorialstaat）でした。君主による国土統一が、フランスやイギリスのように進まず、近代化に立ち遅れたという意味で、「後進性（backwardness）」ということばが使われたりします。日本の戦国時代に似た構図で、各領邦の領主が地域統治の実権を握り、皇帝の統治権は、室町将軍がそうだったように、帝国全域に及びませんでした。神聖ローマ帝国は、領主の数だけ半独立国家が存在していたのが実態でした。

領邦国家の領民は、領主に帰属しています。ここで言う領民の大半は農民で、領主に対する租税負担義務を負っています。その租税負担を逃れる方法の一つが、「都市」への逃亡でした。領主にとっては、黙認できないことでした。皇帝は、その「都市」に特権を与えることで、「都市」を皇帝直属にすることを

目論み続けました。人口規模の大小に関わりなく、「帝国自由都市（Freie Reichsstadt）」が数多く誕生したのは、領邦の力を弱めたい皇帝の政治姿勢の表れでした。しかし、自立した「都市」もまた、皇帝の言いなりにはなかったのです。

◆「都市」と「農村」の線引き

ドイツ語で「町」を意味する“Stadt（シュタット）”は、「街区」を指すと考えるのが妥当です。農村を指す“Dorf（ドルフ）”の反意語とされ、農村を含まないエリアと言えます。イタリアの「コムーネ」が、周辺の農村地帯を含むのとは対照的です。“Stadt”は、「農村ではない所」を意味するのです。ちなみに「城」を意味する“Burg（ブルク → ブール bourg、バラ burgh）”は、本来は“Berg（ベルク「山」）”から派生した「山状の高い城」を指し、「町」ではありません。

この場合、「都市」と「農村」は、自主権の有無で区分されます。自主権は、都市権または自治権（Autonomie）と概念づけられる諸権利です。リューベック近郊の北ドイツでは、領邦が未成熟だったため、「町」の建設がそのまま、皇帝権に関わりなく、自治権に繋がったと考えられます。ハンザの規範となったリューベック法（Lübisches Recht）は、領邦法を兼ねた都市法（Stadtrecht）と言えます。それに対してマルデブルク法は、領邦からの自立を、皇帝が積極的に後押ししたものです。

都市法が定める諸権利には、「市壁築造権」「立法司法権」「行政自治権」などがありました。中でも重要なのは、「市場権（市場開催権 Market town, Marktrecht）」です。この権利は、文字通り市中で「市場」を開いて良い権利です。英語では法律用語、ドイツ語では称号とされるように、「都市」と「農村」を切り分ける重要な役割を果たしました。左図のように、市壁に囲まれた市中に広場が



歴史研究

「近代」というシナプス

あり、「市場」が設定された都市構造は、ヨーロッパで良く見かけるものです。「市場(マーケット、マルクト、マルシェ)」は、「都市」の重要な税収源となり、その盛衰が「都市」の命運を左右したという意味で、大きな役割を果たして行くのです。

◆「都市」と職業技術

バルト海経由の東方輸入商品は、毛皮や木材、鉄や銅などの鉱山資源と、原材料商品が大半でした。イタリア商人がイスラム圏から入手した品々と比べるまでもなく、そのまま転売できる代物ではありませんでした。どこかで誰かが、加工を施す必要がありました。

中世ドイツの「町」には、「ツンフト(Zunft)」と呼ばれた職人(Meister)の組合(Sozietät=society)がありました。日本語では、「同職ギルド」と訳され、親方、職人、徒弟からなる組織と理解されています。「ツンフト」が機能したのは15世紀頃までで、以後は衰退したさなくなります。しかし、その技術が廃れた訳ではありませんでした。「マイスター」は滅びなかったのです。

ケルン(Köln)を中心としたライン川中流域は、現在もドイツ有数の工業地帯です。ケルンは、ハンザに加盟し、人口4万人と同盟の中で最大規模を誇りました。統治者のケルン大司教(Erbischofe von Köln)は、近隣地域のハンザへの加盟を、積極的に推進したと言われています。ケルンは、毛織物やラインラント産ワインの集積地だったほか、鉄鉱石の集積地でもあり、物流基地と金属加工品基地の二面的中心を担いました。また、ウェストファーレン産の麻は、麻織物の繊維産業を育てました。麻布は、絹や綿に比べれば劣悪な繊維製品ですが、帆船用の帆として重要な役割を担っていました。

東方商品は、木材であれば家や家具、金属であれば武器や農耕具や機械装置、毛皮であれば衣類や靴のように、各種の加工技術の発

平泉は「都市」か？

奥州藤原氏が拠点とした平泉は、平安後期の日本史上に、必ず登場する地名の一つです。初代清衡が、居館を定めて中尊寺を建立したことが始まりとされ、2代基衡は毛越寺を建立、3代秀衡は政庁とされる「柳之御所」を拡張し、最盛期を迎えたと考えられています。

奥州藤原氏時代の平泉の概要は、発掘調査が進むにつれて、徐々に明らかになりつつあります。街区らしき痕跡があり、「古代都市」の呼称が使われます。当時の日本では、京に次ぐ規模を誇ったとする見解もあります。

「都市」という概念を設定するに当たって、平泉を「都市」と呼んで良いかどうかは、悩ましい問題です。

「都市」を規定する場合、権力者の行政上の拠点というだけでは、要件を満たしません。居館があれば行政機能を担えますが、周辺に住民街区があって初めて、「都市」が成立します。

その意味で、平泉の街区整備が本格化したのは、2代基衡が毛越寺の造営に着手したとされる1150年(久安6年)頃以降と考えられます。以後、3代秀衡が鎮守府将軍に任じられた1170年(嘉応2年)頃までに、「府」と認識されるまで整備が進みました。18年後の1189年(文治5年)に平泉は滅亡しますが、整備途上の「町」だったと考えるのが妥当です。

「都市」としての平泉には、壕を巡らせた痕跡があるとはいえ、「町」を防御する外壁はありません。「集落」との切り分けが難しく、金の経済力で栄えたとされるものの、商業都市とする根拠は、今のところ未解明です。唯一の証明は、寺院建造物からなる宗教性です。

三内丸山が「集落」である以上、平泉の都市性の証明は、まだ不十分なのです。

歴史研究

「近代」というシナプス

達を促しました。木材加工の発達、建設需要を押し上げたと言われています。金属加工技術は、活版印刷がドイツで生まれたことが示すように、中世末期にはかなり高度化していました。ドイツ語のシュミット (Schmied、英語のスミス=Smith) は「鍛冶屋」を意味し、その名前の広がり、金属職人の数の多さを物語っています。革靴の技術も、ドイツで発達した可能性が高い分野です。ハンザの仇敵となったフッガー家 (Fugger) は、銅の精錬で財を成し、ヨーロッパ産銀を取り仕切るまでに成長しました。

ヨーロッパの「職業 (berf)」観は、カルヴィニズム (Calvinism) によって変化したと言えます。多様な職業は、神が授けたものであり、その職業に精励することで、救いの手は差し伸べられる、とするキリスト教の解釈は、職業を神聖なものにしました。

職業と聖性の結びつきは、例えばパン屋が作るパン、チーズ職人が作るチーズ、家具職人が作る家具、靴職人が作る靴と、それを作る過程に、神の眼差しが注がれることを意味します。サービスを提供する職業でも、同様と言えるでしょう。優れた技術に裏打ちされた製品・サービスは、神からの賜物として生まれるという解釈が可能です。

宗教改革 (Protestantism) の影響を強く受けた地域の職業観は、「近代」に重要な役割を果たすことになりました。職業による貴賤の排除、職業技術による産業の振興、技術を基礎とした製品価値の算出など、南ヨーロッパとはやや異なる価値観を形成しました。

今日的な意味での「技術 (technology)」

「復讐」が裁かれる時

人と人の繋がり (Society) には、いざこざがつきものです。日本では江戸時代まで、いざこざが招いた理不尽な結果に対して「仇討ち」が認められていました。ドイツでは、加害者への「組織的復讐 (フェーデ Fehde)」が認められ、「町」の利権対立に発展することがありました。その場合、非がどちらにあるかわからないケースが多々あり、「フェーデ」が「フェーデ」を呼んだり、被害者組織が市街に拠点を移して「町」を攻撃するケースがありました。「フェーデ」は、「町」の衰退の要因になりました。

ドイツ都市法の発展過程で、被害者側の「フェーデ」の権利は、制約される度合いを強めて行きました。その最大の目的は、都市共同体の秩序維持にありました。権力抗争に発展したケースでは、敗者が復讐権を放棄する「復讐放棄誓約 (ウーアフューデ Urfehde)」が広がり、拘禁 (ハフト Haft) や追放などの処罰を受けました。

「ウーアフューデ」の広がり、規律の強化を促したとされています。殺人や放火、窃盗や脅迫、家庭内暴力 (DV) などの犯罪行為はもとより、賭博や公序良俗に反する行為なども取り締まり (ハフトウーアフューデ Hafturfehde) の対象になりました。

「ウーアフューデ」は、現代法上ではごく当然のことです。どんな理由があれ「復讐」は許されず、その行為自体が処罰の対象になります。しかし、中世ドイツ都市法は、厳格さゆえに、「よそ者」のいわれなき拘束、異質への不寛容 (例えば魔女) など、「町」を夜警化させた側面を持ちました。

■ヨーロッパ中世末期の主な技術職分岐

パン屋	毛織物工	石工	鍛造工	靴職人	籠職人
粉屋	麻織工	大工	染料工	ガラス職人	樽職人
肉屋	毛皮工	家具職人	染色工	宝飾職人	帽子屋
チーズ職人	仕立工	煉瓦職人	紙工	車屋	食器屋
ビール職人	裁縫工	鍛冶職人	印刷工	馬具職人	細工師

歴史研究

「近代」というシナプス

は、16世紀段階からは想像も及ばないレベルに達しています。その間に、各時代のさまざまな職業人が、「技術」の高度化に関わりました。いわゆる「プロフェッショナリズム (professionalism)」は、その過程で形成されたと言えます。結果として、一寒村に過ぎなかった場所が、職業技術で「都市」へと変貌した事例（イギリスのマンチェスターやリヴァプール、アメリカのハリウッドやシリコンヴァレーなど）を生み出しました。

ただし、職業聖性が人々に牙をむく製品を作った時、不幸な歴史を生んだことも事実です。また、産業資本家と労働者が階層分化する過程で、農村とは異なる貧富を生んで行くのも事実です。

◆「製造」を組み込んだ仕組み

日本の職業観は、残念ながら宗教性と結びつきにくいのが通例です。「銭＝俗＝悪」の思考パターンが根底にあり、技術を金銭に換算する方程式の発達も、ヨーロッパに比べて遅れたと言わざるを得ません。しかし、職業観には括れないとしても、「道」の考え方があり、「道を極める」という価値観を生みま

した。「技を磨くことで人を磨く」は、優れた技術は、優れた人間性 (Humanity) を醸成し、優れた人間性を獲得してこそ優れた技術が生まれる、という思考パターンになりました。「道」には、俗悪観念としての金銭勘定が入り込みにくいため、日本の職人は、「金に疎い」と言われ続けました。

いずれにしても職業は、「近代」以降に市民権を得た概念です。官職や宗教職、農民などの階層 (classes) とは別に、職業は、対物技術を生業とすることを可能にしました。

経済価値は多くの場合、モノの需給価値です。モノの加工を担う職業分岐は、「技」による商品開発を促しました。ガラスがレンズを生み、レンズは望遠鏡を生み出しました。望遠鏡の需給価値は、ガラスやレンズとはちがうのです。市場 (market, Markt) は、その新技術への対価として「価格 (price)」を決定します。そこには、モノを転売する仲介商法や金融取引とは異なり、「製造 (product)」という要素を組み込んだ仕組みがあります。その「製造」を組み込んだ仕組みは、後の「資本主義 (Capitalism)」の原点になるのです。

「社会」について

「社会」という日本語は、“Society”の訳語として、明治時代に作られました。『明六雑誌』が発祥と言われています。「会社 (company)」を逆にしただけのことだと伝えられ、その安易さに反発した福沢諭吉は、「人間交際」という訳語をあてました。

“society”は本来、「地縁・血縁に捉われない集団」と理解できます。職業組合のような団体も“society”で表現できます。「人間交際」は、何のことか見当がつかない日本語ですが、あえて言えば「人間関係」に相当するのでしょうか。人同士の「繋がり (ネットワーク)」です。

「ツンフト」のような同業組合は、厳密には“Genossenschaft”とするのが妥当なのかもしれません。しかし、ここでは、広義の人の集団を表現する“Sozietät=Society”としました。イタリア都市を表す「コムーネ (Comune=Commune)」との対比があります。

「社会」という日本語は、「関係」「絆」というニュアンスを伝えてはいません。そのため、「地域社会」「日本社会」のような、漠然としたイメージしか湧いて来ないのです。福沢の言う「交際」が隠れてしまうのです。この言語ギャップは、超えなければならないし、解消する努力が必要です。ここでは、試行的に「社会的関係」という訳語を、適宜使いたいと思います。

歴史研究

「近代」というシナプス

●占星術から天文学へ

宇

宙の中心に太陽があり、大地と海は、その周りを回る球体の星という知見は、ギリシャ的知見とされています。ポーランド人のコペルニクス (Nicolaus Copernicus 1473 - 1543) は、そのギリシャ的知見に触れて天体観測し、死の直前に出版した『天体の回転について (De Revolutionibus Orbium Coelestium)』で、「太陽中心説 (Heliocentric Theory) = 地動説」を唱えました。

この出来事は、それまで信じられていた「プトレマイオス (Claudius Ptolemaios) の天文学系 = 天動説 (Almagest)」を 180 度転換させたとして、その後「コペルニクスの転回 (Kopernikanische Wende)」「パラダイム転換 (paradigm shift)」のように、神話を転換させた事例の象徴になりました。事実、コペルニクスの見解は、埋もれていた古代の知見の再評価を通じて、それまでの認識を覆しました。そして、天文学 (Astronomy) の新機軸を提示し、今日の宇宙科学への道筋を開いたのですから、「科学革命 (Scientific revolution)」と言えます。

◆「中心」への眼差し

人類が天文学を必要としたのは、大きく分けて二つの要因があると考えられます。

① 宗教的要因

天体に神的な力があると考え、信仰や崇拜の対象とした。星占いとしての「占星術 (Astronomy)」を含む。

② 暦法的要因

天体 (太陽か月) の動きにより、年月日と時刻を算出する基準とした。天体計測の「占星術 (Astronomy)」を含む。

両者のちがいは、①が心的 (哲学的) なものの、②が実用的なものです。「占星術」については、月の満ち欠けや太陽観測などの科学的データが、星占い (Horoscope) レベルの

予測や吉凶の判定に使われたという意味で、両者にまたがります。

太陽への眼差しは、エジプト第 18 王朝のイクナトン (Ikhnaton BC1372 - 54) が、太陽神アテン (Aten) を唯一神とした「アマルナ時代 (Amarna Age)」のように、崇拜の対象として、常に上位にあったと言えます。アマルナ時代の宗教改革は、結果的に失敗しますが、太陽神信仰がなくなった訳ではありませんでした。むしろ、太陽神を唯一神とする信仰は、ユダヤ教の唯一神信仰に繋がったとする見解があり、宗教的な意味での太陽の位置づけは、キリスト教やイスラム教にも通じる中心的存在だった可能性が高いのです。

ここで言う宗教的な意味での太陽は、ヒトの心と連動しています。絶対的な存在としての太陽は、ヒトに対して「自分とは何か」「ヒトとは何か」という哲学的な問いを投げ掛けて来ます。ヒトはその時、太陽を絶対的な神と位置づけ、天地創造の主としました。『旧約聖書 (Old Testament)』では、その冒頭に光の出現を唱えています。つまり、太陽中心説とは、古代エジプトから信じられていた一つの学説だったことになります。

逆に言えば、その太陽中心説を 180° 逆転させたプトレマイオスの「天動説」とは、いったい何だったのかとなるのです。15 世紀のキリスト教世界とイスラム教世界は、唯一神を信仰しながら、プトレマイオスの宇宙観を支持しました。その宇宙観は、古代ギリシャの多神教世界が生んだものです。太陽が、『旧約聖書』が説く唯一神の表象だとすれば、地球が宇宙の中心だとする「天動説」と、論理が矛盾することになります。

つまり、宗教的な意味でねじれていたのは、プトレマイオスの宇宙観の方で、コペルニクスは、それを元に戻したに過ぎないという仮説が成り立つのです。“revolution (元に戻す)” です。

歴史研究

「近代」というシナプス

◆日々の暦を作るために

天文学が果たしたもう一つの役割は、暦の作成と時間の算出です。洋の東西を問わず、天体観測を通して、それは行われました。ヨーロッパの場合は、太陽と地球の関係からそれを算出する太陽暦、東アジアの場合は、月の満ち欠けから月日を算出する太陰暦（時刻計測は太陽を基準にした）が主流でした。

現代科学で1年は、地球が太陽を一周する公転周期として算出されます。時刻は、地球が太陽面に対して1回転する自転周期が、算出の基準です。天動説の公転は、太陽が地球を一周する周期となりますが、基軸がちがうだけで、結果はほぼ同じです。

太陽を基準にした1年は、例えば日の出や日没の位置が、どれくらいのサイクルで反復するかを計測すれば算出できます。ある山を基準に、山頂からの日の出（または日没）が、何回目後に同じ位置になるかで、実測できます。366回目という周期は、古くから知られていたと言われ、1年＝365日になるのです。

一方、太陰暦では、新月から新月（または満月から満月）の日数が、1カ月の基準になります。約30日と見積もられた周期が、1カ月です。その周期の13回目の始まり（12回目の終わり）が、季節循環（1年）とほぼ同じという知見は、古くからありました。しかし、実際の月の満ち欠けの周期は、平均29.5日です。

$$29.5（日） \times 12（カ月） = 354（日）$$

この結果、

$$365（日） - 354（日） = 11（日）$$

というズレが生まれます。

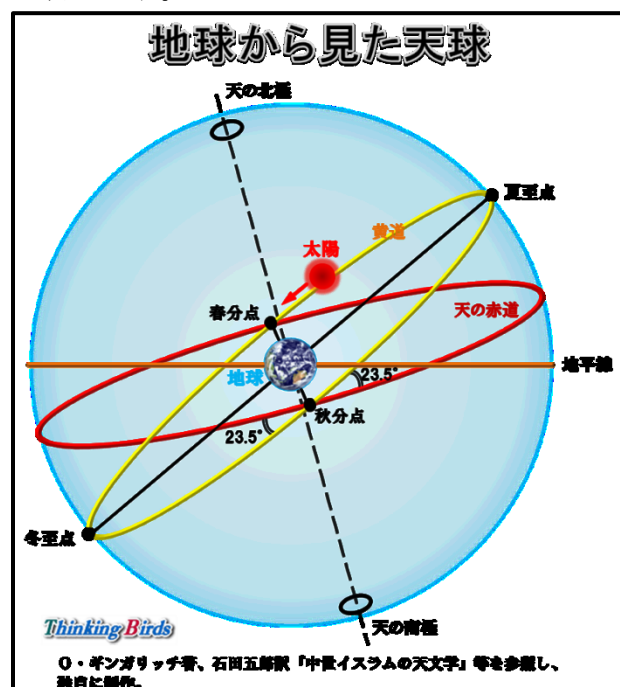
12カ月という区分は、日射量の変化から生じる季節的な寒暖差ばかりでなく、耕作適期や収穫適期を判断するため、どうしても必要でした。しかし、太陰暦と太陽暦1年とのズレは、12カ月≠1年を補正しない限り、年を重ねるごとに拡大しました。

また、1日の時間計測は、太陽の正中（その日の太陽が真南に来る時）が、基準になりました。日時計の影が、真北を向いた時（その日の中で最も影が短い時）です。その時刻を正午に設定すれば、次の正午までが1日になります（実際は1日＝24時間±α）。太陽の傾きで伸びる影に角度ができることから、正中からの角度で、時刻を設定できました。

$$360^{\circ} \div 24（時間） = 15^{\circ} = 1時間$$

日時計の正中線からの影の傾きを「角度」と呼び、等分した傾きごとに時間を設定をしたのでしょう。中国でも「十二支」が設けられたように、「12」が一つの基準値になりました。

このような暦の作成と時間の設定は、ヨーロッパ場合、プトレマイオスの宇宙観を基礎にしていました。15世紀段階で最先端のイスラム天文学も、その基礎はプトレマイオスでした。当時の「占星術」には、いかがわしいものが多々あったとはいえ、実用性という点で、プトレマイオスの体系は優れたものでした。実測可能な地球から見た太陽や月の動きに対し、実測不可能な太陽から見た地球の動きは、まだまだ役に立たないものだったと言えます。



歴史研究

「近代」というシナプス

◆グレゴリウスの暦

太陽暦を主流としたヨーロッパの暦法は、ローマ教皇グレゴリウス 13 世 (Gregorius XIII 1502 - 1585) が 1582 年に採用したグレゴリウス暦 (Gregorian calendar) によって、精度が向上しました。

グレゴリウス暦は、ローマ教皇庁暦として採用されたため、各月の配分にキリスト教的要素があります。しかし、根底にあるのはプトレマイオスの体系です。その精度は、今日の世界標準になるほど高く、教皇庁専用暦に留まることなく、運用が広がって行きました。また、コペルニクスの「地動説」発表後のことで、学識が高かったグレゴリウス 13 世は、それを知っていたと思われます。コペルニクスは生前、暦法改革について、ローマ教会から諮問を受けたとも言われます。ローマ教皇は、コペルニクスを否定などしませんでした。むしろその説に触発されて、グレゴリウス暦が誕生した可能性があるほどです。

では、ローマ教皇庁はなぜ、1615 年になってから、「地動説」を否定する見解を表明したのでしょうか。というより、惑星運動を解明したケプラー (Johannes Kepler 1571 - 1630) の「地動説」を否定しないのに、ガリレオ (Galileo Galilei 1564 - 1642) だけがどうして、「地動説」を語る者として異端審問を受けたのでしょうか。ガリレオの人格に、何らかの問題があったからでしょうか。

前述したように、「地動説」は、キリスト教の教義と矛盾するものではありません。むしろ「天動説」の方が矛盾しています。しかし、「天動説」が蓄えた知の体系は、日常生活に欠かせない「暦」を編み出しました。その「暦」の精度が高ければ高いほど、一括りに否定してしまうことはできないのです。

分かっていなかったのは、ローマ教皇なのか、それともガリレオなのか。ガリレオが後世に残した功績は、木星の衛星などを望遠鏡

で次々に「発見 (discover)」したことです。

しかし、彼が説いた科学理論の有効性は、後世の人々が覆して行きました。その意味でガリレオの歴史的評価は、コロンブスの評価に通じるものがあるのです。

◆ノストラダムスの占星術とリヨン

中国発祥の紙の製法が、イスラム圏経由でヨーロッパに伝わり、文字が広く普及しました。グーテンベルク (Johannes Gensfleisch zur Laden zum Gutenberg 1398? - 1468) が活版印刷術を発明し、文字の普及はさらに進んで、出版活動が増えたと言われています。

出版の活性化は、活字文化 (Print culture) の発展をもたらしました。その内容は多岐にわたり、いわゆる良書もあれば悪書もあるという、玉石混交の状態を生みしました。

フランス南東部にあるリヨン (Lyon) は、「出版の街」として栄えたと言われています。古代ローマ期に建設され、ゲルマン民族の大移動期には、ブルグント族 (Burgunden) が勢力圏とした地域でした。ブルグント族は、フランク族 (Franks) との抗争に敗れ、徐々にフランク化しますが、地政的にイタリアに近いことから、固有の文化を育みました。

リヨンの最初の印刷工房は、1473 年に開設されたと言われています。パルテルミー・ビュイエ (Barthélemy Buyer 1473-83) というフランドル生まれの商人が、印刷工を雇い入れて始めたと言われています。初刊は古書本で、ローマ教皇にもなったロタリウス枢機卿 (Lotharius 1198-1216) が著した『教義の捷徑 (しょうけい Compendium brev)』。著者の名言集で、受託出版 (今で言う自費出版) に似た形式で刊行されたようです。以後、100 年余りにわたって、リyonは、「本の街」として栄えたと伝えられています。

リヨンの「本の街」としての活況は、16 世紀に山場を迎え、以後は衰退しました。刊行書籍は、キリスト教の教書や寓話を集めた

歴史研究

「近代」というシナプス

書物、実用書、詩集など、多岐に及びました。その中で、後世に名を残した書物として挙げられるのが、フランソワ・ラブレー (François Rabelais 1483? - 1553) 著の『ガルガンチュア (Gargantua)』とノストラダムス (Michel Nostradamus 1503 - 1566) 著の『大予言 (Les Prophéties de M. Michel Nostradamus)』です。いずれも奇書に属する書物と言えます。

活版印刷の普及は、同じ本の複数製本を可能にしました。木版でも不可能ではありませんが、文字組の効率と耐久性は、活版がはるかに優れていたと言えます。リヨンの出版事業者は、その印刷術を導入し、商品としての書籍販売に目を向けました。事業である以上、「売れる本」の発行を考えるのは必然でした。内容の良し悪しはともかく、ベストセラー本を発行することは、事業者にとって一つの目的になりました。最悪の場合、内容が嘘八百でも「売れば、こっちの勝ち」です。

ノストラダムスの『大予言』は、一つの詩集です。「予言 (Prophéties)」というタイトルを、著者自身がつけたかどうかは不明です。1555 年に刊行された初版本は、フランス国王フランソワ 2 世 (François II de France 1544 - 1560) の摂政だったカトリヌ・ド・メディシス (Catherine de Médicis 1519 - 1589) にも寄贈され、時を経ずに王が死去したことから、その死を言い当てたと宮廷内で評判になったとされています。それが、この本が注目されるきっかけだったと言われ、重版本が出されました。つまり、売れたのです。

ノストラダムスの肩書は、主に医師です。占星術は趣味だったと思われ、やはり趣味だった詩の形式で「予言」として著したのが、『大予言』の本来の姿だった気がします。医師が本業とは別に、趣味の本を書くことは、今日でもあり得ます。その著者を、人の生死や天変地異を「予言」できる予知能力保持者したのは、出版事業者と読者です。

ノストラダムスの占星術には、天文学に精通した科学性が備わっていない、とするのが今日の定説です。コペルニクスやガリレオが、自身の天体観測を元に主張したのに対し、ノストラダムスの占星術は、他の占星術家の引用で成り立ち、占星術師 (天文家) として働けるだけの実力と実績は、恐らくありませんでした。にもかかわらず、その名声から、王宮侍医の地位に就くのですから、世渡り上手の為せる技としか言いようがありません。

◆未来を予測するメディア

出版事業者が一つの事業戦略として、人々の不安を煽るような内容の書物を、あえて市場に投入することはあり得えます。天変地異の予測を、一定の科学的根拠を元に提示したり、老化や疾病のメカニズムを、医学的に解説したりする書物は、今日でも市場に提供されています。また、星占いに限らず、占い本の出版もあります。『〇×はこのままでは滅びる』式の警鐘本も、一定の頻度で出版市場に提供されています。あるいは、フィクション仕立てで、不安や恐怖を煽る書籍を出版することもあるでしょう。

ノストラダムスに関して言えば、20 世紀末の日本で、一大ブームが巻き起こりました。その占星術の信憑性は棚上げにして、世紀末の「人類滅亡の予言」が巷間で話題になり、「オカルト」が社会現象になりました。この時のオカルト本の売れで、出版事業者は潤ったと思われます。

天文学が今日の社会に果たす役割は、宇宙の謎を解く夢物語だけに限りません。衛星通信の利用が日常化し、宇宙が日々の暮らしに直結する時代を迎える中で、その開発の具体化をサポートする役割を果たしています。出版業界は今日もなお、良書と悪書が混在する状態を呈していますが、人類が宇宙に向けて来た眼差しを、良心に基づいて科学的に伝えることが、出版の本来の役割のはずです。

歴史研究

「近代」というシナプス

●「聖愛」と「俗愛」

動

物としてのヒトの性 (sex) は、他の動物にも見られるように、受精時に交配された遺伝子によって方向づけられます。その性は、生物として子孫を残す準備として方向づけられ、ヒトの場合はほぼ、その性別 (性器で判別される肉体上の性) を生涯にわたって保持します。

成人したヒトは一般的に、異性に興味を抱き、性行為 (sexual intercourse) を求める傾向を強くします。その願望を促すのは、男女ごとのホルモン作用 (hormonal effect) と考えられ、性欲が強まる傾向を示す期間のことを、動物的な意味で発情期 (estrus) と呼んでいます。そして、異性との出会いと性行為を通じて、新しい命を生み出します。その自然 (nature) は、基本的にはヒトに備わった本能 (instinct) です。

ヒトの場合、本能のままの性的行動は、野卑 (savage) とみなされ、疎まれる傾向があります。野生 (nature) を制御 (control) する能力が求められ、その抑制能力のことを理性 (reason) とか理知 (interagency) と呼んでいます。動物としてのヒトの性的本能は、種を維持する上で不可欠ですが、ヒトは、「性」に関する一定の倫理 (ethics) を身につけることで、社会的意味でのヒトに成長します。子を授かった男女の「対 (pair)」は、一時的にせよ長期間にせよ、生活空間を共有して日常を営み、その親子による生活共同体を「家族 (family)」と呼んでいます。

◆宗教上の「性」

このような生殖行為は、人類の生命活動と共に、脈々と営まれ続けて来たことです。その行為を否定してしまつては、生物種としての人類が成り立たなくなり、元も子もないことになります。しかし、ここで取り上げるルネサンス以降に現れた「性」は、そのような生殖行為とは異なります。

人類は太古から、後の人々が「ヴィーナス (Venus)」と名付けた女性と思われる偶像を作りました。日本の縄文遺跡からも、乳房を持つ土偶が発見され、女性像と考えられることから、「ヴィーナス」と名付けられました。古代ギリシャ文明の遺産とされる「ミロのヴィーナス (Vénus de Milo)」や「サモトラケのニケ (Victoire de Samothrace)」と名付けられた大理石像は、よりリアルな女性肢体を造形しています。これらの女性像の製作意図は明確ではありませんが、女性を偶像化する風習は、古くから世界各地にあったと言えます。

しかし、宗教上の「性」は、洋の東西を問わず、「罪」と関わる事項になりました。

キリスト教が浸透したヨーロッパでは、その教義によって、偶像崇拜を排除しました。アラブ世界に浸透したイスラム教も、偶像崇拜をより厳格に禁じました。ヨーロッパ史上の中世は、近隣世界も含めて、裸体の「ヴィーナス」と縁を切った世界を形成していたと言えます。

キリスト教は「姦通 (adultery)」を罪としています。『マタイによる福音書 (Gospel of Matthew)』は、その罪をこう綴っています。“Anyone who even looks at a woman with lust has already committed adultery with her in his heart. (誰でも情欲を抱いて女性を見るだけで、すでに心の中でその女性と姦淫を犯したことになるのです)”。

日本の場合は、仏像が至る所で作られたとはいえ、女性を表象する像はなく、仏神を表象した姿として拝まれ続けました。ここで作られた像は、信仰の対象であり、日常的な「性」にまつわる表現とは無縁でした。

仏教では、ヒトの罪の一つとして「邪淫 (じやいん)」を挙げています。色欲や愛欲に溺れることは「五悪罪」の一つとされ、修行僧の場合は、女性と会うことすら禁じられまし

歴史研究

「近代」というシナプス

た。「愛念の過ちを断ち切って、犀の角のようにただ独り歩め」。「愛念」という感情は、「過ち（罪）」なのです。ここで言う「愛」とは、「穢れ」「不浄」を意味し、女性との交わりはそれに該当すると考えられたため、修行僧は、女人禁制の山にこもりました。

このような宗教的戒律は、「罪」とされる行為が、世俗界に満ちていたからこそ、規定された可能性が高いと言えます。ヒトの世俗界の一般的な「性」に関する規範は、ほぼ本能のままに近い動物状態だったのでしょう。

◆描き出された「性」の表情

ルネサンス期を迎えたイタリアでは、キリスト教が封印して来た「ヴィーナス」が復活しました。ギリシャ神話の「アプロディーテー（Aphrodītē）＝愛と美と性の女神」を起源とする「ヴィーナス」は、色彩豊かな油彩技法を取り入れ、若い女性の官能的な裸体画になりました。15 世紀にボッティチェッリ（Sandro Botticelli 1445－1510）が描いたヴィーナスは、神話的要素を残していますが、16 世紀にティツィアーノ（Tiziano Vecellio 1490－1576）が描いたヴィーナスは、寝室で誘惑的な裸体をさらしていたり、野外で裸体のまま愛を求める姿として描かれています。

このような絵画が可能になった背景には、技術的要素の進歩があったことは確かです。油絵の具の発達、基底材への麻布の使用に加

え、画家自身の絵画技法の向上がありました。肉体のよりリアルな描写は、生体としてのヒトの肉体の再現という意味では、明らかに技術が向上しました。

一方、プラトン（Plátōn BC427－BC347）の再認識が、良し悪しは別として、いわゆる「プラトニック・ラブ（Platonic love）」の価値観を生んだと言われています。肉体的性行為より精神的恋愛（love）を重視する風潮を指しますが、男女が抱く恋愛という感情に価値を見出し、その感情に「美（beauty）」を結びつけて行きました。

ティツィアーノの 1515 年頃の作品に、『Amor Sacro e Amor Profano（聖愛と俗愛）』という油彩画があります。石棺に腰を下ろす二人の若い女性がいて、左側の女性は白いドレス姿、右側の女性は腰に布を掛けただけで半裸です。二人の間の中央に、裸の幼児がいて、石棺の水を無邪気にかき混ぜています。この作品が、二人の異なる女性を描いたのか、同じ女性の異なる姿を描いたのかは不明です。しかし、幼い命を育む「性」を、一方は「神聖な（Sacro）」、一方は「冒瀆的な（Profano）」姿として描いています。

この作品は、一見すると、ドレスをまとった女性は「聖」、半裸の女性は「俗」と映ります。ドレスの女性の背景が城なのに対して、半裸の女性の背景には村と教会があります。

■Amor Sacro e Amor Profano（聖愛と俗愛）



出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Amor_sacro_e_Amor_profano

歴史研究

「近代」というシナプス

上層と下層、衣装と裸姿は、衣を脱いだ時の聖俗をどこで分けるのかを、問うているようです。そして、中央に描かれた裸の子供が、最も純真な存在のように見えるのです。

◆購買される「性」の作品

女性の裸体を中心にした性的表現（sex expression）は、現代社会では、ありふれた表現活動の一つです。男性週刊誌の表紙を飾るのは、多くの場合、水着姿の若い女性で、グラビアには複数の女性ヌード写真が掲載されています。インターネット上では、より猥褻な（obscene）画像や映像が、至る所で公開されています。描写され、塑像され、撮影されたそれらのコンテンツは、有償無償を問わず、消費され続けている現実があります。それを芸術と呼ぶにせよ、猥褻と呼ぶにせよ、男性の心を性的に刺激する目的で、現代社会に流通しているのです。

ルネサンス期に描かれた女性の裸体画は、単なる画家の趣味ではありません。描き手としての男性画家は、注文客の求めに応じて、若い女性を描き、その作品を納品することで、代金の支払いを受けました。あるいは、男性画家が独自に描いた裸婦画を買い受けたい顧客がいて、売買された作品もありました。モデルの女性には、多少のモデル代が支払われたことでしょう。それぞれの裸婦画には、金銭が絡んでいたのです。

ここには、いわゆる「性の商品化」があり、買春（prostitution）とは異なっています。買われたのは、生身の女性ではなく、生身の女性を描いた絵。ある意味ではプラトニックで、ある意味ではポルノグラフィックです。古代の女性偶像とルネサンス以降の裸婦像との大きなちがいが、ここに 있습니다。

◆エロス・ポルノ・ヌード

ルネサンス期の絵画における性的表現は、男性から見た女性でした。聖母マリアにせよ、ヴィーナスにせよ、市井の女性にせよ、男性

性的表現への感性

性的表現に対する感性は、個々人でマチマチです。女性ヌード写真を見た時、「美しい」とか「不快」とか、「愛しい」とか「いやらしい」とかの感じ方は、価値観や倫理観によって異なります。見る側の性別や年齢、シチュエーションによっても、それは異なるでしょう。個々人の感じ方は、基本的には自由です。

性的表現は、「性」に関する知識（性教育）と関連しています。医学的（動物学的）な意味での「性」は、成人したヒトのからだの仕組み、性交、受精、妊娠、出産などのプロセスとして説明できます。でも、そのプロセスは、異性に対する「気持ち」を前提として、初めて成り立つことです。異性が「不快」と感じているにもかかわらず、性的欲求を押し通すことは、基本的には不適切とされ、時には法的処罰の対象になることがあります。その気持ちのことを、女性たちは「愛」と呼びがちですが、お互いへの「慈しみ」や「思いやり」と言えます。

また、性的表現は、「快楽」と関連づけられがちです。受精と出産を目的とせず、「快楽」を目的とした性的行為は、楽しみとしての「性」の領域を押し広げました。しかし、性犯罪を助長する側面を持つことは否めません。

私たちは、ヒトに関する性的表現が、単に性交と出産を促すためにあるとは考えません。また、興味本位で「性」に関心を抱くことを、必ずしも「悪」とはみません。

ただ、性的暴力（レイプ、DV、幼児虐待等）の助長や良心を冒瀆する表現は、法律的にも倫理的にも許されないと考えています。また、「愛」の神話化による女性側からのみだらさの開示を、全面的に容認するつもりもありません。

いずれにしても、現代における性的表現は、商品ツールの一つになっています。その是非の判断は、ヒトの本能とヒトはどう向き合うのかという問いへの、一人ひとりの回答を求めるのです。

歴史研究

「近代」というシナプス

が描く女性として「美」に変換されました。

ティツィアーノの作品タイトルに使われた「Amor (アモール)」は、聖俗のちがいはともかく、日本語では「愛」と訳されます。英語では“Love”になりますが、むしろ「エロス (Eros)」に近いと考えられています。

「エロス」ということばは、ギリシャ神話の恋愛の神エロース (Erōs) が起源とされています。恋愛や愛欲を司る神とされ、異性に対する恋慕の苦しみを表しています。恋愛感情を指しているため、ことば自体に肉体的性は乏しく、恋愛の苦しみのものを意味します。

「愛しい＝苦しい」は、本人だけの心の状態のため、ことさらに「エロス」を甘美な感情にしました。その「愛の苦しみ (Amor)」をティツィアーノは、美しく描きたかったのかもしれない。日本語の「エロス」は、「性的いやらしさを醸す姿や言動」の意味で、「エロ」と簡略化され、「卑猥」とほぼ同義になっています。『Amor Sacro e Amor Profano』を「エロい」と表現するかどうかは、個々人の日本語センスの問題でしょう。

一方、性的興奮を喚起することを目的にしたコンテンツを表す学術用語は、「ポルノグラフィ (pornography)」です。一般用語では「ポルノ」と簡略化され、猥褻な内容を含むコンテンツを指しています。「ポルノグラフィ」は、ギリシャ語の *pornographia* (ポルノグラフィア) が起源で、売春に関わる用語とされています。19 世紀中頃から英語で借用され、売春を描いた小説などを指す語になりました。日本語で言う「官能小説」です。その後、売春に限らず、女性の裸体や性行為を描いた絵、写真、映像などを指す用語に拡張し、定着しました。日本語の「ポルノ」は、主に男性向けの性的表現を扱うコンテンツを、半隠語的に指していました。しかし、児童ポルノなど社会的に有害なコンテンツを指す用語として、行政機関や教育機関、報道

機関でも使うようになりました。隠語めいた使用法は、日本では減少しています。

また、「ヌード (nude)」の語源は、ラテン語の *nūdus* (裸の、無防備な、あからさまな) とされています。裸の状態を指してはいませんが、ヒトの裸に限定したことばとは言えません。「覆うものを取り除いた」、あるいは「取り除かれた」状態を指しています。日本語の「ヌード」は、主に「女性の裸」の意味で使われることが多く、ほぼ性的なことばとして流通しています。

3 語のちがいは、「エロス」が形のない性的な心の状態、「ポルノ」「ヌード」は形があるモノですが、「ポルノ」は性的な表現、「ヌード」は性的とは限らないモノの状態です。

◆性的表現と社会

16 世紀末から 17 世紀にかけて、ヨーロッパでは「魔女 (Hexe)」を弾劾する動きが高まり、大規模な迫害 (魔女裁判) によって、数十万人以上の女性が犠牲になりました。

18 世紀末以降の「性」は、フランスの哲学者ミシェル・フーコー (Michel Foucault 1926–1984) によると、「テクノロジー」による政策的制御の対象になりました。①女性身体の医学的分析を介した社会と家族における「母」の創出、②子供の性的関心を「危険な芽」として摘む教育、③人口抑制を目的とした婚外出産の社会経済的な規制、④性的快楽を「病理」とする精神医学への組み込み——を、フーコーは挙げています。

「性」を取り扱う表現は、どれほど美しさを強調しても、おぞましさと背中合わせです。コンテンツとしての「性の商品化」の進展は、性的表現の氾濫とは裏腹に、出産抑制の意識を高め、少子化による社会構造変化まで生んでいます。性行為は元来、「神聖 (holiness)」かつ「猥褻 (obscene)」なものです。その聖俗を伴う行為の表現は、実態との向き合い方を常に問われるのです。

歴史研究

「近代」というシナプス

●失われた肉食

王 侯貴族や大富豪、一部の特権階級の人々ならともかく、多くの庶民（People）が一年を通して食糧に困らなくなるのは、ヨーロッパの場合、早くて19世紀中頃、遅い地方では、20世紀半ば以降と考えられます。気候史上では、小氷期が終わった頃からです。日本の場合は、恐らく戦後になってからです。

「近代」が食糧不足の時代でなければ、ヨーロッパからアメリカ大陸に、多くの人々が移住する必要はなかったかもしれません。食糧基地を築くとして、北海道開拓に心血を注いだ明治政府の政策も、必要なかったかもしれません。

ヨーロッパの食卓と言えば、肉食をイメージする人は多いはずです。「ヨーロッパは、土地が痩せていて、穀物が実りにくいから、肉ばかり食べるようになった」とする風説がまかり通るほど、ヨーロッパ人と肉食は、深い結びつきがあるように見えます。

◆北方系の食文化

ヨーロッパにおける肉食は、ゲルマン系に代表される北方系の食文化とされています。西アジア起源の麦類を中心とした農耕は、地中海世界が先行していて、特にローマ帝国期に「Cultūra（耕す）＝Culture＝文化」と

して独自の地位を獲得しました。また、キリスト教における「聖なる食事（Eucharist）」が、植物由来のパンとワインのように、肉食と聖性は切り離されていました。

一方、北方地域では、気象条件などの環境要因もあって、農耕の発達が遅れ、動物性資源に依存した食生活が長く続きました。この食生活は、遊牧由来とする説があります。

中世ヨーロッパ人は、5大家畜（ウシ、ウマ、ブタ、ヒツジ、ヤギ）はもとより、イノシシ、シカ、野ウサギ、多数の鳥類、魚介類など、肉食の限りを尽くしたとされています。歴史学者のブローデル（Fernand Braudel 1902 - 1985）によると、1600年頃の大型家畜の主産地は、現在のスイス、デンマーク、ハンガリー近郊、黒海西岸域、ベラルーシ付近。そこから肉食資源が、5万頭～20万頭規模で、主にドイツ方面に出荷されました。

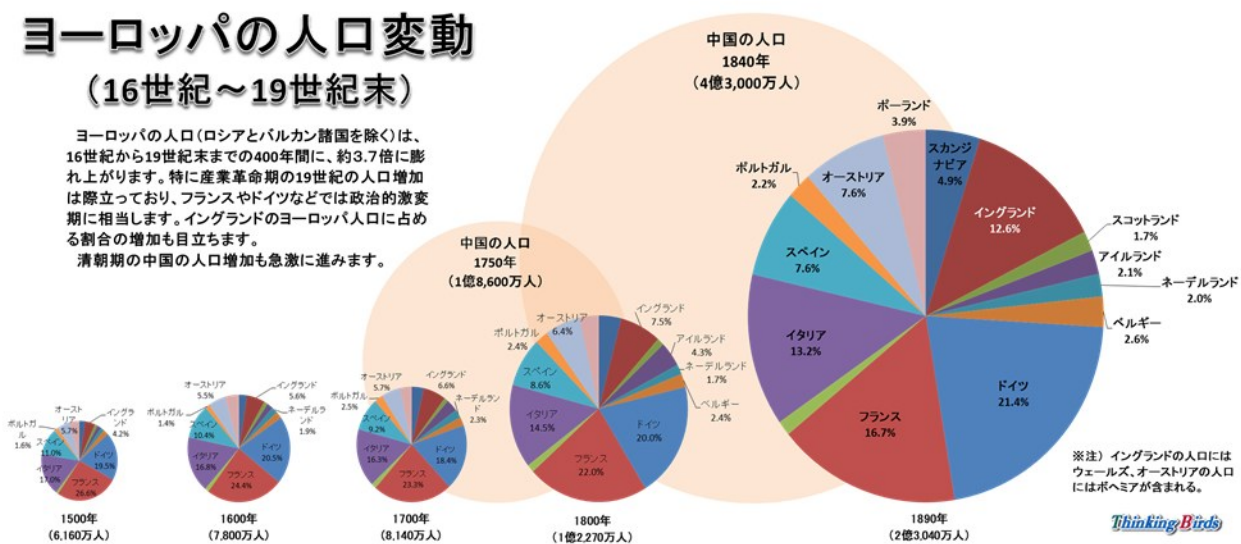
◆肉資源の枯渇

ペストの大流行後のヨーロッパの肉食は、1550年頃をピークに、減少の一途をたどったとされています。その傾向は、19世紀中頃まで約300年にわたって続き、肉不足の時代が到来しました。燻製肉か塩漬け肉の切れ端を、週に1～2度しか食べられない。そういう食生活が、一般的になりました。要因は、中世期の乱獲による肉資源の枯渇、気候変動

ヨーロッパの人口変動 (16世紀～19世紀末)

ヨーロッパの人口（ロシアとバルカン諸国を除く）は、16世紀から19世紀末までの400年間に、約3.7倍に膨れ上がります。特に産業革命期の19世紀の人口増加は際立っており、フランスやドイツなどでは政治的激変期に相当します。イングランドのヨーロッパ人口に占める割合の増加も目立ちます。

清朝期の中国の人口増加も急激に進みます。



歴史研究

「近代」というシナプス

による生態系の変化が挙げられています。

肉資源に乏しいヨーロッパの 300 年間は、常に食糧危機のリスクを抱えていました。小氷期の影響か、飢饉もたびたび起こりました。麦類の需要が高まり、その結果、穀物価格が上昇、供給不足が常態化しました。イギリスを除くヨーロッパでは、戦争と低迷が繰り返されたのです（17 世紀の危機）。

フランスでは、16 世紀中頃にイタリアの料理法が導入され、宮廷料理は豊かになりました。しかし、民衆の食生活は貧しく、ベーコンやソーセージのような保存食、卵ベースの簡素なスープ、塩漬け野菜などが主で、チーズは産地からの購買品でした。魚介類やキノコ類も、ほぼ地域産品でした。パスタのような小麦ベースの食品は、麦種（ライ麦、燕麦等）のちがいから発達せず、小ぶりの固パン（後のフランス菓子）が主流でした。

イギリスでは、17 世紀に入ると第二次農業革命が始まり、囲い込みで荒れた牧草地に代わって、耕地開拓が国家規模で進められま

した。その結果、独立自営農民（ヨーマンリー Yeomanry）が生まれ、加えてアメリカ植民地での穀物生産が増えて、ヨーロッパで唯一、穀物過剰の状態になりました。

ドイツでは、移入品種（イモ類）の栽培が奨励されました。南北アメリカ大陸からの食糧や食材の輸入と移入、植民のよる農場経営などについては、項を改めて取り上げます。

◆のしかかる食糧問題

ヨーロッパにとって食糧問題は、克服すべき大きな課題だったことは確かです。後の各国の植民地主義は、この食糧問題を解決する手段という側面を持っています。ヨーロッパで、肉食が本格的に復活する 1850 年代まで、一部の特権階級を除く人々の食卓に、豪華な肉料理が並ぶことはありませんでした。寒さと飢えの時代が、長く続いたのです。

なお、東アジアでは、小氷期の影響かはともかく、大雨、洪水、干ばつなどの気象災害、飢饉、疫病の流行などが多発しました。しかし、その中でも人口増加は続きました。

■小氷期の主な飢饉や災害

年 代		出来事
小氷期	マウンダー極小期	1485～92 年 日本で山城国一揆
		1512 年 日本の関東地方で大飢饉
		1524～25 年 ドイツ農民戦争
		1525 年 南ネーデルラントのイープルで「救貧条例」公布
		1540 年 日本で疫病が大流行（天皇が諸国寺社に祈願奉納）
		1550 頃～ イギリスでエンクロージャーによる農民の都市流入
		1642 年 日本で諸国飢饉（徳川幕府が農民にコメの常食禁ず）
		1650 年～ フランスで飢饉多発
		1656 年 パリに貧民対策の「大病院」創設
		1669～70 年 日本各地で洪水多発（西日本、東海、関東、明石大風雨）
		1688 年 朝鮮で疫病が大流行
		1700 年代 ロンドンでテムズ川が氷結
		1730 年 ドイツでシュレーゲン飢饉
		1771～72 年 ドイツでザクセン飢饉
	ダンントン極小期	1757 年 日本で宝暦の大飢饉
		1783～88 年 日本で天明の大飢饉
		1793 年 清の洪亮吉『治平篇』『生計編』で人口増加を憂慮
		1798 年 イギリスのマルサス『人口論』で人口爆発に警鐘
		1816～17 年 ドイツでバイエルン飢饉
		1823 年 北京で大雨により大運河が決壊
		1820～35 年 朝鮮で疫病流行と大飢饉

歴史研究

「近代」というシナプス

●閉じられた 15 世紀

外

部勢力の圧迫によるヨーロッパ世界の縮小は、15 世紀が最も深刻でした。西へ、西へと迫いられるように、ヨーロッパは圧縮状態になり、その内部では、結束どころか、分裂と対立を繰り返しました。

イタリアでは、一時的な平和期（ローデューの和）に、フィレンツェやヴェネツィアなどで、ルネサンスが花開きました。一方、ローマの人口は、3 万人余りにまで減ったと推計されています。「教条主義 (Dogmatism)」の本山としてのローマは、組織の腐敗を幾度となく指摘され、改革の必要性を唱えられながら、それは遅々として進まず、足元から人離れを起こしていました。

ルネサンスの本質が、神の真実 (Fact of God) より、ヒトの肉体精神 (Body and Spirit) を取り戻そうとする運動だとすれば、ヨーロッパの中心を自負して来たイタリアは、忘れていた野生 (nature) への回帰を、信仰とは別のレベルで望んだのかもしれません。

◆ローマ的伝統の行方

古代ローマ (Ancient Rome) は、ローマ市民権 (ius Civile) やラテン市民権 (ius Latii) からなる権利法を定め、他の部族を区別する制度にしました。その伝統を持つイタリアは、他のヨーロッパ地域に対して、文化や経済の面で優位性を保持し続けました。近代法の基礎をなした市民権という概念は、イタリア諸都市に息づいていました。

しかし、実態としてのイタリアは、文化面や経済面で優れていたがために、近隣諸王の侵攻を繰り返し受けました。イタリア諸都市は、自衛能力を高めなければならず、時にはオスマン皇帝に庇護を求めることも厭わず、自治権の保持に努めました。

そして、ローマは、宗教拠点に特化した結果、実体経済の現場（商業都市機能）や技術

発展の現場（職人都市機能）を失い、人々の日常性との乖離が進みました。文化的または経済的な優越を誇るがために、教化されるべき民衆にも増して、野性 (nature) からの誘惑や金銭的な欲望を、「都市」の裏面として受け入れて行ったと言えます。

また、東方圧力の前面に立ち続けた神聖ローマ帝国では、対オスマン戦の会議を皇帝が諸侯 (Fürst) に呼び掛けても、その出席率は極めて低かったとされています。諸侯にキリスト軍＝十字軍 (Kreuzzug) を組織する気はもはやなく、目先の利害に捉われていた実態が、浮かび上がって来ます。

◆「美」と「愛」からの再起は

ルネサンスは、キリスト教の禁欲原理が封印していたヒトの自然 (nature) を、古典古代の再認識を通じて「文化 (culture)」に昇華させた運動とされています。東ローマ帝国の滅亡後は、イタリア諸都市に東方から知識人の流入があり、フィレンツェやヴェネツィアは、高度な知見に恵まれました。

ヒトとしての自然 (nature) には、感情や欲望が含まれています。ヒトは、神 (God) にも獣 (animal) にもなる生き物として、この世にあります。ギリシャの神々は、そのヒトに「美」と「愛」への回帰を促し、そこからの再起を伝言したのかもしれません。

「近代」の始まりとされる 1453 年のコンスタンティノープルの陥落を、あるポーランド人作家は、ヨーロッパが「片目になった」と記しました。もう一つの目のローマは、視力の衰えを抱え、中心の座を担い切れなくなりました。ルネサンス以降、ローマを支えたイタリア諸都市は、「美」と「愛」の空間とは裏腹に、「血」と「憎」とに彩られ、ヨーロッパ史の表舞台から、姿を消して行きます。イタリアの実質的な地位低下は、スペイン没落後ですが、その地盤沈下は、ヨーロッパ最初の「近代革命」と言えるでしょう。

【出典及び参考文献】

- ・歴史学研究会編『世界史年表 第2版』(2001年12月、岩波書店)
- ・日本歴史大辞典編集委員会編『日本史年表 増補新版第1刷』(1984年10月、河出書房新社)
- ・山川堅太郎ほか編『世界史小辞典』(1972年、山川出版社)
- ・村川堅太郎ほか著『世界史地図』(1983年3月、第23刷、山川出版社)
- ・野村正七ほか編著『世界地図帳』(1985年1月、第7刷、昭文社)
- ・桑名一博編『西和中辞典』(1987年2月、小学館)
- ・福井毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』(1989年、旺文社)
- ・国松孝二編『独和大辞典』(1990年1月、小学館)
- ・岩崎民平／小稲義男監修『新英和中辞典』(1977年、研究社)
- ・ジョーゼフT・シンプリー著、梅田修ほか訳『シンプリー英語語源辞典』(2011年3月、2刷、大修館書店)
- ・水谷智洋編『改訂版 羅和辞典』(2009年3月、研究社)
- ・フェルナン・ブローデル著、村上光彦訳『物質文明・経済・資本主義 15-18世紀 日常性の構造1-2』(1985年11月-1986年3月、第2刷、みすず書房)
- ・フェルナン・ブローデル著、神沢英三訳『地中海世界1 空間と歴史』(1992年9月、第3刷、みすず書房)

◆ローマの落日 神々からの伝言

◎都市への回路Ⅰ

- ・Wikipedia「コムーネ」(2019年3月15日閲覧)
<https://ja.wikipedia.org/wiki/コムーネ>
- ・Wikipedia「コンダート」(同上閲覧)
<https://ja.wikipedia.org/wiki/コンダート>
- ・Wikipedia「シニョーレ」(同上閲覧)
<https://ja.wikipedia.org/wiki/シニョーレ>
- ・Wikipedia「グランドウカ」(同上閲覧)
<https://ja.wikipedia.org/wiki/グランドウカ>
- ・Wikipedia「ジェノヴァ銀行」(同上閲覧)
<https://ja.wikipedia.org/wiki/ジェノヴァ銀行>
- ・『COUNTRY PROFILE Republic of San Marino』(サンマリノ共和国大使館)
http://rsm-giappone.com/jp/jp_embassy-of-the-republic/
- ・ピエール・アントネッティ著、中島昭和、渡部容子共訳『フィレンツェ史』(「クセジュ文庫」1986年4月、白水社)
- ・クリスチャン・ベック著、西本晃二訳『メジチ家の世紀』(「クセジュ文庫」1984年1月、白水社)
- ・E・ベクター・モーガン著、小谷豊治監訳『貨幣金融史』(1989年7月、慶應通信)
- ・大黒俊二著「為替手形の「発達」—為替の中の「時間」をめぐって—」(『シリーズ世界史への問い3「移動と交流」』、1990年4月、岩波書店)

◎都市への回路Ⅱ

- ・フィリップ・ドラランジェ著、高橋理監訳『ハンザ』(2016年12月、みすず書房)
- ・ロンド・キャメロン／ラリー・ニール著、速水融監訳『概説 世界経済史Ⅰ』(2013年1月、東洋経済新報社)
- ・Wikipedia「歴史上の推定地域人口 McEvedy & Jones (1978) による各地域別人口推定値」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/歴史上の推定地域人口> (2019年3月10日閲覧)
- ・林玲子著「世界歴史人口推計の評価と都市人口を用いた推計方法に関する研究」(2007年6月)
- ・Wikipedia「ネーデルランド歴史地図「LOW COUNTRIES (1477)」」(2019年3月15日閲覧)
- ・Wikipedia「ドイツ歴史地図「DAS HEILIGE RÖMISCHE REICH um 1400」」(同上閲覧)
- ・田中正義著「中世都市の慣習法とその史的基盤(1)—ノリッジ市の場合—」(1990年、『立教経済学研究』第44巻第1号)
- ・柳父章著『翻訳語成立事情』(1982年4月、岩波新書)
- ・山本健著「南ドイツのウーアフェーデ(Urferde)に見る中世都市社会の変容」(歴史学研究会編『歴史学研究NO.587』、1988年11月、青木書店)

歴史研究

「近代」というシナプス

- ・山本健記「中世ドイツ都市法の邦訳 (1) 1450 年、低地ライン地方の小都市ブランケンベルク都市法」(2001 年 3 月、『敬愛大学国際研究』第 7 号)

◎占星術から天文学へ

- ・トーマス・クーン著、中山茂訳『科学革命の構造』(1984 年 6 月、みすず書房)
- ・Wikipedia「イクナトン」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/イクナトン> (2017 年 5 月閲覧)
- ・フロイト著、吉田正己訳『宗教論—幻想の未来』(『改訂版フロイド選集 8』、1984 年 5 月、日本教文社)
- ・関根正雄訳『旧約聖書 創世記』(1981 年 11 月、岩波文庫)
- ・国立天文台「よくある質問」<https://www.nao.ac.jp/faq/>
- ・O・ギンガリッチ著、石田五郎訳「中世イスラムの天文学」(『サイエンス日本版 通巻 175 号』、1986 年 4 月、日経サイエンス社)
- ・Wikipedia「ガリレオ・ガリレイ」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/ガリレオ・ガリレイ> (2019 年 5 月閲覧)
- ・宮下志朗著『本の都市リヨン』(1990 年 10 月、晶文社)
- ・Wikipedia「ノストラダムス」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/ノストラダムス> (2019 年 5 月閲覧)

◎「聖愛」と「俗愛」

- ・川上正澄著『男の脳と女の脳』(1982 年 9 月、紀伊國屋書店)
- ・フロイト著、懸田克躬訳『性欲論』(『改訂版フロイド選集 5』、1985 年 5 月、日本教文社)
- ・『マタイの福音書 第 5 章第 28 節』(「英語で聖書を読もう！ わかりやすい聖書の入門と解説」)
http://eigoseisho.blog.jp/archives/mathew_0500.html (2019 年 4 月 14 日閲覧)
- ・Wikipedia「宗教における罪／五戒」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/宗教における罪／五戒> (2019 年 4 月 14 日閲覧)
- ・中村元訳『ブッダのことば—スッタニパータ』(1989 年 5 月、岩波文庫)
- ・Wikipedia「ティツィアーノ・ヴェチェッリオ」(2019 年 4 月 14 日閲覧)
<https://ja.wikipedia.org/wiki/ティツィアーノ・ヴェチェッリオ> (2019 年 4 月 14 日閲覧)
- ・Wikipedia 絵画画像「Amor Sacro e Amor Profano」
https://it.wikipedia.org/wiki/Amor_sacro_e_Amor_profano (2019 年 4 月 14 日閲覧)
- ・クルト・バッシュビッツ著、川端豊彦、坂井洲二訳『魔女と魔女裁判 集団妄想の歴史』(1977 年 7 月、法政大学出版局)
- ・森島恒雄著『魔女狩り』(1981 年 11 月、岩波文庫)
- ・ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』(1986 年 9 月、新潮社)

◎失われた肉食

- ・佐藤洋一郎著『食の人類史 ユーラシアの狩猟・採集、農耕、遊牧』(中公新書、2016 年 3 月、中央公論新社)
- ・須藤春子著『フランス料理の歴史』(2001 年 2 月、独立行政法人農畜産業振興機構)
https://sugar.alic.go.jp/japan/view/jv_0102b.htm (2019 年 3 月 30 日閲覧)
- ・ジョオン・サースク著、三好洋子訳『消費社会の誕生 近世イギリスの新企業』(1984 年 9 月、東京大学出版会)
- ・安元稔著「17-18 世紀ヨーロッパの人口変動」(『シリーズ世界史への問い 1 「歴史における自然」』、1989 年 12 月、岩波書店)

◎閉じられた 15 世紀

- ・野田又男著『ルネサンスの思想家たち』(1974 年 3 月、岩波新書)
- ・山脇直司著『ヨーロッパ社会思想史』(1994 年 2 月、東京大学出版会)
- ・Wikipedia「歴史上の推定地域人口 McEvedy & Jones (1978) による各地域別人口推定値」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/歴史上の推定地域人口> (2019 年 3 月 10 日閲覧)
- ・エレヌ・アルヴェレル著、尚樹啓太郎訳『ビザンツ帝国の政治的イデオロギー』(1989 年 2 月、東海大学出版会)

「近代」というシナプス ～連鎖する「近代革命」～

次 章 予 告

第3章 海洋のコスモロジー

◆海洋の教徒たちと東アジアの海賊たち

「ヒト」と「動物」

ポルトガルのアフリカ航路開拓

東アジア海域の秩序崩壊

ポルトガル人と東アジア人

◆海洋を渡る技術とモノたちのミッション

大航海を支えた造船技術

地球上の経度と「教皇子午線」

火薬の時代への序章

海を渡る鉄砲

メディカル・ミステリー・ツアー

ほか

シンキング・バース新書

「近代」というシナプス
～連鎖する「近代革命」～ 第2章

2019年4月15日（改訂2版）発行

著 者：シンキング・バース
歴史科学研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：シンキング・バース

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表、グラフを含めてシンキング・バース及び当該著作者に帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。